

「そうですね。目の附けどころはいいと思います。情報を共有させる為には、ここの部分はまず絶対に必要でしょう。問題は……」

「やはり、これだけじゃ十分じゃないですね」

「ええ、あなたもお気付きのことと思いますが、人の意識を変えるのは、とても難しいと思います。マスコミなどを利用する方法は無意識的に生きている人に対しては効果があるでしょうが、意識的な生き方をしている人に対しては、それほど大きな効果は期待できないと思います。それと、日本人の意識はいつも意識を働かせて生きている人たちの意識の集合と捉えたほうがよくて、無意識の人たちの意識の集合と捉えるとうまくいかないと思うんです。だから、100匹目の猿を実現する為には、実態が伴う必要があると思うんです。つまり、実際に体験させる必要があるということです」

「ああ、なるほど、そうですね。とすると、何か実験サイトのようなものを作るとか……」

「それも一案でしょう。でも、何を、どうやって？というのが問題になります……ところで、田辺さん、食事はお済みですか？」

「はい、こちらに来る前に済ませました」

「何か飲み物でも頼みましょうか？」

田辺は話の中に夢中になって何も注文していなかったことを思い起こし、恥ずかしくなった。もっともウエイトレスも注文を聞きに来なかったから田辺に非はなかったのだが、自分が女房役を果たしていないことに気付いた。

「申し訳ありませんでした。コーヒーでよろしいですか？」

「ぼくのことはどうでもいいんですよ。それより、あなたが寛げてないんじゃないかと思って」

「内観さん、優しいんですね」

田辺は手をあげて合図を送り、やって来たウエイトレスにコーヒーを2杯注文した。

「楠木さんのことですが、内観さんに企画案を作るように言われてから暫く検討していたようですが、何か思い付いたようで、アメリカのMI

Tを訪問した後、モンリオールのバイオ博物館を調べるって言っていました。あの方はとっても行動力があるんです。恐らく今日帰国の途に着いていると思いますが、明日は企画案を持って来ると思います」

「それは楽しみですね」

「ところで、内観さんは・・・あっ、そうだ、これからリーダーって呼ばせてもらっていいですか？」

「ええ、かまいません」

「それじゃあ早速、リーダーは何かインフラのイメージをお持ちですか？」

「さっきも言ったように、僕は実体験を通して意識を変える場を与える為に、インフラを用意したらいいんじゃないかと思っています。勿論、あなたのおっしゃったようなプロパゲーション（普及拡大）の手段を同時に実施しながら行うのが理想的だと思うんですが」

「何か、具体的なイメージはおありですか？」

「まだ、人に説明できるほど具体的になっていないけど、僕はある一つの地域を理想化してしまうのがいいんじゃないかと思うんです。そして、そこは長期滞在が可能な観光地のような場所にしてしまい、その地域自体の拡張と、点散的な拡散を狙ったらどうかと考えています。難しいのは10兆円程度の予算でどこまでできるかということと、その地域を何処にするかということです。」

「それは、どこか山の中の集落のような場所とかですか？」

「それも一案でしょうが、できたら現存する町をそのような形に変貌させるのがいいんじゃないかと思うんです。あの東日本大震災のとき日本全体が悲しみの中にありました。そして、初めは政府の復興予算をどう使うか紆余曲折がありました。次第に被災者も直接被災していない自分も同じで、お互いに助け合って生きてゆくという、物理的事象を越えた意識が前面に顕れてきて、当初の計画を凌ぐスピードで、現在の三陸海岸都市の基礎が出来上がりました。あの地域はひとつの理想的な地域になる要素を持っていました。でも、一旦復興基盤の構築が達成されると、人々の意識はまた3次元世界に引き戻されてしまいました。あのよ

うに意識の共有化という現象が起きるのは日本人の持っている特性だと思います。あのときのような意識の一体化を継続させるためには、インフラや公的機関を、物理的な仕組みから精神的な仕組みに至るまで、最初の状態を維持できる構造にする必要があります。ですから、新たに設ける地域にはいくつかの法人の企業を誘致し、ニートやフリーターの中で比較的精神性の高いと思われる人たちを採用してゆくのです。企業体も社会と融合した北欧的な形態で運営し、その閉じた社会全体で変容を示すように誘導するのと同時に、その中に居る個人の生き方自体が変わってゆくようにさせてはどうかと考えています。そうすることで、そこに生きる人たちを意識的な生き方をするように誘導するのです」

「それができたらすごいですね。それを全国民に知らしめてゆくわけですね」

「そう、5年間くらいは成果が出ないかもしれないけど、一旦国内全体に認知されれば、一般の人々の生き方に爆発的な影響を与えてゆくと思うんです」

「その計画、とっても難しそうですが、企画案の概要としてまとめてみたいと思います。明日、何らかの意思表示が必要になるでしょう。口頭での説明だけでは、企業内では無視される可能性もありますから、プレゼン資料にまとめておいた方がいいと思います。ここでは事務処理の道具がありませんので、一度、わたくしのアパートに戻って、作業をしたいと思います。ご一緒して頂けませんか？」

「ぼくはかまいませんが、女性の部屋に一人で伺ってもいいですか？」
田辺は一瞬逡巡した風だったが、笑窪を作って言った。

「勿論です。内観さんはリーダーですもの。それに、概説書を明日までに作るとなると、それが一番いいと思いますから」

スナックを出て少し大通り沿いに歩いてから、田辺は路地に入って行った。曲がりくねった路地を5分ほど進むと、2階建てのコンドミウム風のアパートが立ち並んでいる一角に出た。そのアパート群の一番端の棟の2階の部屋まで階段を上がった。賢は黙って附いて行った。部屋の鍵を開けてドアを開くと、田辺が言った。

「リーダー、狭いところですがどうぞご遠慮なくお入りください」

「それじゃあ、失礼します」

中は2つの部屋に分かれていて、ダイニングキッチンを兼ねたリビングルームと、入口からは死角になる方向に寝室があり、寝室に向き合ってバスルームが設けられていた。賢のマンションと同じくらいの広さのアパートだった。賢は一種独特な女性の部屋の匂いを感じた。それは香水の香りに近いものだった。部屋の奥には二人掛けと一人掛けの籐のカウチが小さなガラス板を載せたセンターテーブルを囲むように配置されていて、二人掛けのカウチの向こうにガラスのデスクとスチール製の銀色のイスが置かれている。デスクの上にはデスクトップ型のパソコンが置かれていた。田辺は脱いだコートを入口のフックに掛けた。部屋の奥に進むと鞆をデスクの上に置きパソコンの電源を入れてから、賢にカウチに座るように促してコーヒーを入れる為にキッチンに向かった。

「いい、部屋ですね。ここにはどのくらい住んでいるんですか？」

「えーと、もう7年になるかしら。男の人でわたくしの部屋に入ったのは、わたくしの家族を除いてあなただけです。おかしなところは無いかしら」

「とってもきれいな部屋だと思います。それに、落ち着きます」

コーヒーカップを二つ手にして来て、一つをセンターテーブルの上に置きながら田辺が言った。

「それは、よかったわ。本当はリーダーに来て頂くのは少し怖かったんです。わたくしあまり部屋のデコレーションに神経を使わないでしょう。ですから・・・」

「いいえ、とっても居心地がいいです」

「ありがとうございます・・・では、早速まともに入らせて頂きます。田辺は手にしていた自分のコーヒーをパソコンの横に置いてから椅子に腰掛けた。パソコンに向かうと賢が息を呑むほどのスピードでキーボードを叩き始めた。

「リーダー、タイトルは何にしましょうか？」

「インフラグループ企画案3としたらどうかな」

「どうして3ですか？」

「君の案がふたつあるから、3番目の案だろう」

「でも、わたくしの案はあまりにも貧弱ですから……」

「いや、まだどんなふうに展開するか分からないだろう。僕は君の案も重要だと感じているんだ。それをどう生かすかがキーになると思うし」

「わかりました。それではそうします。リーダーは暫くそこにある新聞でもご覧になってください。先ほどおっしゃっていたことをまとめますので……」

「分かった。それじゃあそうさせてもらうね」

田辺は30分間ほどキーボードを叩き、マウスを操作していた。その間、賢は田辺の部屋の中をそれとなく観察していた。窓は西に向いているようで、4時近い冬の日差しが部屋の奥まで差し込み、反対側の壁を明るく照らして淡い灰色の壁地に描かれた船のような模様を浮き上がらせている。その壁には40センチ角ほどの現代画が架けてある。この部屋のデコレーションはそれだけだった。デスクの横には硝子戸の付いた書棚があり、いろいろな種類の書籍が並んでいた。技術関連の書籍で埋め尽くされている棚の一角にヘルマン・ヘッセの「知と愛」、ポーボワールの「第2の性」、キルケゴールの「死に至る病」、ニーチェの「ツァラツストラ」とマルチン・ブーバーの「愛と認識の出発」そして誰の作品か分からない「性の本質」という書籍があった。日差しが書棚のガラス戸に反射して眩しい。賢は静かに目を閉じて瞑想をした。意識に空白を埋めると、由美からの言葉が聞こえて来た。

「賢さん、わかりますか？今どこですか？今日はお会い出来ませんか？」

賢は瞑想を解いて、由美に応えた。

「今、鶯谷にいる。これからの仕事のことで打ち合わせ中だ。今日は無理だけど来週の水曜日の夕方会おう。お母さんとの約束もあるから一緒に食事をしよう」

「本当はとっっても会いたいんですけど、今日は我慢します。水曜日はわたしがレストランを予約しておきます。またテレパシーで連絡をください

い」

賢がふと気付くと田辺がA4用紙4、5枚を手にして一人掛けのカウチに座っている。

「まとめてみました。ちょっとご覧になって頂けますか？」

賢がセンターテーブルの方に身を乗り出すと、田辺も顔を突き出してA4の紙をセンターテーブルに乗せようとしたが、手が滑って紙を床に落とした。賢と田辺が同時にそれを拾おうとして、ふたりの顔がほとんど接するほどに近付いた。賢がほほ笑むと、田辺の顔が真っ赤になった。田辺は慌てて体を起こすと賢から視線を逸らし、賢が手にしている紙に視線を移して言った。

「わたくしの勝手に簡単なイラストも入れてみましたが、どうでしょうか？」

賢は暫く「提案概説書」と題された資料を見ていたが、ぼつりと言った。

「ありがとうございます。僕の説明した通りに、短時間でよくまとめてくれました。とてもうまく表現できていると思います。ひとつ要望ですが、このイラストだけでなく、もうひとつ追加して頂けますか？つまり、このイラストは町をイメージさせますが、山村のようなイメージのイラストを加えて、固定的な印象を与える危険性を避けた方がいいと思うんですが、どうですか？」

「そうですね。そうします。わたくしもこのままでいいかどうか少々迷いました」

そう言うと、田辺はすぐに立ち上がってデスクに戻り、またキーボードとマウスを操作し始めた。賢は田辺の背中に向かって話し掛けた。

「田辺さん実存主義の本を読んでいらっしゃるんですか？」

田辺は振り向きながら言った。

「ああ、その本ですね。それは父の本なんです。少し興味があつたので借りて来たんです。本当はあまり読んでないんですよ。ボーボワールドだけは読んだんですが、他のはざっと目を通しただけなんです。わたくしは女性が第2の性だなんて考えません。むしろ、女性の方が男性より、生存という点で見れば優れた部分が多いように思います。やはり時代的

な背景があるんじゃないかって感じますね。今は女性がとっても生きやすい時代ですから。わたくしは一生働き続けてもいいと思っています」
「本当にそうですね。人間の場合、女性はとても美しく形作られているし、自分で子供を産むことも選択できる。男性には子供を産むことはできないし、そのきっかけを作ることも確率的なチャンスとしてしか与えられていないように見えます。でも、それは動物的な面から観たときで、本質的な面から観ると、男性も女性も関係なく人間は無限の可能性を持っているって思いませんか？」

「はい、わたくしは科学的な点からしか考えられませんが、リーダーがおっしゃるように意識が形体を作ることができるのでしたら、男性も女性も関係ないと思います・・・出来ました。ご覧になって頂けますか？」

そう言いながら、田辺は椅子から立ち上がると賢の横に来てプリンターで打ち出したばかりの1ページを差し出した。

「そうです。これでいいと思います。これで概要は言い表せていると思います」

賢はA4の紙をセンターテーブルの上に並べ、1枚を抜き取り、そこに今用意された1枚を挿入した。

「ちょっと、一緒に内容をレビューしてみましようか？」

田辺は少し躊躇したが、やがて遠慮がちに賢の隣に腰掛けた。賢がプレゼンを想定して解説をしていった。賢が力説しているように思えるところで、田辺はその都度頷いた。一通り解説し終わると、賢は田辺に右手を差し出して握手を求めた。田辺も笑窪を浮かべてそっとそれに応じた。田辺の手は柔らかく暖かかった。賢が田辺のアパートを出たのは5時半を回った頃だった。自分のアパートに戻った時には6時半を過ぎていた。アパートに着くと愛子がゲートの脇に立って待っていた。

「賢パパお帰りなさい」

「ただいま。愛子、寒いじゃないか。中に居ればいいのに」

「だって、寂しいんだもの」

「部屋には誰も居ないのか？」

「うん、祐子さんは夕食の買い物に出掛けたの。一人でいると怖くなってくるの。ここにいる方がまだ賢パパに近付いているようで、少しは安心できるから」

瞳が涙ぐんでいるのを見て、賢は愛子の背に軽く手を当てながらゲートを入った。部屋に入ると暖かな空気が流れ出してきて、賢は寛いだ雰囲気包まれるのを感じた。

「明日のことで、プロジェクトのサブリーダー田辺さんと準備をしていたんだ。これからも遅くなることがあるから、そうだ、愛子もスマホを持ったほうがいいな。明日は愛子の初めての登校だから、一緒に行きたいけど、僕は新しい仕事で会社に行かなくてはならないから、祐子と一緒に行ってもらう。帰りに待ち合わせてスマホを契約して来よう」

「うん、祐子さんもそう言っていたわ。スマホのことも、明日賢パパと一緒にいけないから、祐子さんが一緒に行ってくれることも。祐子さんはいつも賢パパと同じことを考えているのね」

「うんそうだな。きっとその内、愛子も同じような意識を持つようになるよ」

「賢パパのように優しい、温かい心を持てるかな。いつも賢パパが近くに居てくれるって思っているから、安心しているけど、まだわたし、時々怖くて、悲しくて身体が震えてきてしまう。わたしの体の中に、そういう冷たい、恐ろしい血が流れているんじゃないかって。そんな時、心の底まで凍り付いてくるような感覚がするわ。こんなわたしでも、賢パパと同じように考えることができる人間になれるかな」

「大丈夫だよ。元々愛子はとっても優しく、純粋な心の持ち主じゃないか。今でも十分温かい心を持っているよ。もう怖がらなくても大丈夫だよ。愛子は僕がいつでも見守っているんだから」

「わたし、スープを作るわ。祐子さんがお刺身とお肉を買って来るって言っていたから、お肉は祐子さんがお料理すると思うのよ」

そう言いながら、愛子はキッチンに向かった。賢は麻子の遺骨の前で合掌し、暫く瞑目してからソファーに座った。愛子が賢にシャワーを浴びるように促した。賢が浴室から出て来ると、祐子が愛子と話していた。

「祐子、戻っていたのか」

「あなた、大変よ。さっき、東電機の前を通ったらテレビの前に人が集まっているでしょう。何かしらと思って覗いてみたら、今度はフランスで135人が集団自殺をしたらしいの、ニュース速報でやっていたわ。前回のアメリカの集団自殺も大勢だったわね。確か70人くらいだったかしら」

「73人だよ」

「よく覚えているわね。今度は135人でしょう。どうなっているのかしら」

「誤った宗教の教義が原因さ。俺はロッキーでの集団自殺があった後、少し調べてみたんだ。どうやら、アメリカにある新興宗教団体の教義の中に、「生まれ変わりの目的」という一節があって、その中で「人間はこの世に一つの使命を持って生まれて来る。その使命を認識して、実行出来る人と、それに気づかずに年を重ねてしまう人がいる。そして、自分の使命を認識できた人は一つの段階を終了して、次のステージに上がる。人間は最終段階に到達することで神との一体化が実現できる。しかし、気付かなかった人はそのまま死んでしまうと、次の生では一つ段階を落としてもう一度やり直すことになる。段階を下ってゆくと段々文化と生活レベルの低い世界に生まれ変わらなければならなくなる。それを防ぐ為には純粋な意識に戻ってもう一度生をやりなおす必要がある。しかし、やり直しが効くのは若い内だけで、結婚して生活が軌道に乗った段階ではもう手遅れだ」と述べている。これがその新興宗教の生まれ変わりに関する考え方なんだ。その上、その宗教の教義には終末思想があって「もう世界の終りが迫っていて、今度の生で目的が達成されないと、また、下等動物からやり直さなくてはならない」と教えているんだ。だから、今まで気が無く、唯漫然と生を送ってきたことに気付いた人たちは焦燥感を煽られて、可哀そうな人たちは自殺するという結果になっているんだ。人生を悲観している訳ではないので、一人で死ぬことができない。宗教団体の同士と一緒に、急いでもう一度生をやり直そうとしているんだ。今度の集団自殺も恐らく同じ理由だろう。悲しい話だね」

「あなた、わたしたち何かしてあげられないかしら」

「本来の自己意識に戻してやる以外に、防ぎ様がないと思うよ」

「そうね。どういう考え方をした人が、どこにどれだけ生きていくか分からないわね。特に自分たちの考えの及ばない奇跡のような現象を起こす教祖に、自分自身を全託してしまっている人たちは、そこから抜け出すことは不可能に近いでしょうね」

「今度の仕事は、成功すれば、そういう人たちに対しても道を示すことができる可能性も秘めているんだ」

愛子が出来上がったスープを食卓に並べている。祐子は買って来た刺身を皿に盛り付けてから、手早く豚肉を取り出し、それをフライパンで焼き始めた。その流れるような一連の作業は、主婦が毎日こなしている家事の手際よさだった。愛子は祐子の手さばきに感心して見入っていた。暫くして、豚肉の生姜焼きがテーブルに用意された。愛子が慌ててご飯を用意して夕食の準備が出来上がった。愛子が予め用意しておいた料理を、麻子の遺骨の前に供えて戻って来るのを待って食事が始まった。その日の食事はいつになく静かだった。祐子は久しぶりに賢に抱かれてまだ身体にその余韻が残っているようだった。賢が近くにいるだけで嬉しかった。愛子は賢に優しく励まされて心が穏やかになっていた。

「あなた、明日はわたしが愛子さんを連れて湾岸中学に行くわ。それでね、愛子さんも携帯を持った方がいいと思うのよ。だから、夕方スマホを契約する為に待ち合わせをしましょう」

「うん、俺も同じことを考えていたよ。愛子さんのことはよろしく頼むよ。本当は俺が連れて行きたいんだけど。祐子も俺も同じだからな。明日は必ず出社しなければまずいと思うし」

「わかっているわ。だから今日はここに泊まるわ。あなたは寝室で寝て。わたしと愛子さんがここで寝るわ」

愛子が少し不安そうに賢の顔を見た。賢は微笑みながら頷いた。食事が済んで、祐子と愛子が片付けを済ますと、先ず祐子がシャワーを浴び、その後で愛子が入浴した。賢にバスタブ（浴槽）で入浴してもよいかわざわざ確認をした。愛子はバスタブが気に入ったようだった。3人は

翌日のことを考えて早めに床に就いた。愛子は賢の懷に体を埋めたときの安心感が得られないことに不安を覚えた。あの恐ろしい情景が蘇ってきて、急に体が震えてきた。震えは次第に酷くなっていった。祐子はそのことに直ぐに気付いた。床に入っている愛子の方に身を寄せて優しく言った。

「愛子さん、一緒に寝ようか？」

「う・うん」

「こっちにいらっしゃい。わたしもその方があったかいし」

愛子は祐子の布団に潜り込んで来た。祐子の布団の中は暖かかった。愛子の体の震えはまだ止まらなかった。祐子はそっと愛子を抱き寄せた。愛子は祐子の胸に顔を埋めた。がたがたと震える愛子の目から涙が溢れてきた。愛子は次第に祐子の胸の温もりに落ち着きを取り戻していった。その温もりは麻子の温もりだった。祐子はそっと愛子の肩を抱き締めめた。

「おかあさん・・・・・・・・」

翌日、午前8時には湾岸中学校の校長室に愛子と祐子の姿があった。校長からの激励の言葉を受けた後、担任に引率されて愛子と祐子は教室に入った。愛子は生徒達の前に立った。祐子は後方の入り口の付近に立って愛子が紹介される様子を参観した。担任からの紹介が終えた後、愛子の挨拶の言葉があった。愛子は堂々としていた。

「わたしは佐波先生からご紹介頂いた内観愛子と申します。本日和歌山県の紀ノ川第2中学校から転校して来ました。東京には小学校の修学旅行の時に来ただけですから、分からないことだらけです。皆さんにはいろいろなことを教えて頂きたいと思います。既にテレビなどを見てご存知の方もいると思いますが、わたしは一昨年(2010年)10月に失踪し、去年(2011年)10月に帰還しました。その間中学校には通えませんでしたので、1学年遅れています。来年の受験に向けて勉強を頑張っていきたいと思います。わたしの趣味はバレエです。見るのが好きですが、今度こちらのアメリカンバレエスクールで教えて頂くことになりました。皆さん、仲良くしてください。よろしくお願い致します」

クラスの生徒は全員拍手をした。中には反抗期中であることを顕わにしている生徒もいたが、一応拍手はしていた。後方に祐子が立っていることが大いに影響しているようだった。愛子はセーラー服の襟を少し広げている大柄な鋭い目つきの女生徒の隣の席だった。席に着く時、愛子が軽く会釈したが、その女生徒はちょこっと頭を下げてあとは知らんぷりを決め込んでいた。それでも反発している態度でなかったことに祐子はほっとした。1時限だけ参観する許可を得ていたので祐子は真剣な眼差しで授業を見守った。1次元目は担任の佐波が指導する道徳の授業だった。祐子が中学生だった頃には無い授業だった。この日のテーマは「殺人事件について」という内容だった。祐子はこの内容は愛子にはきついと思ったが、愛子が客観的な視点を維持して授業を受けていることが見て取れた。担任が説明を始めた。まず殺人のパターンをあらゆる角度から観るやり方を説明した。――過去のカルト集団が実際に行ったポアという形での殺人、わら人形などに向かって呪いを掛ける精神的呪詛による殺人、衝動的な意思（切れた状態）に基づいた殺人、病床の親族に対する逃避的な肉親殺し、特攻隊、ジハードなどの自分を犠牲にした殺人、民族間の嫌悪による殺し合い、大戦での大量殺戮、個人的な怨恨による陰湿な殺人、面倒くささあるいは嫌悪による幼児の放置による間接的殺人、自己のエゴで相手を抹消したいと考え実行する殺人、自己のエゴを成就する為の周囲を無視した行動による結果的な殺人、混乱の中での間接的な殺人、発狂などによる無作為殺人、等々例を引いて次々に説明した後、生徒に殺人についてどう思うか問い掛けた。

「君たちもニュースなんかでよく殺人事件のことは耳にし、場合によっては目にすることもあるでしょう。そんなときどんなふう感じていたか思い出してみよう。それでは・・・先ず、初めに児島君、君はどう感じるかな」

指名された生徒はその応答の仕方から、クラスのリーダーのようだった。

「殺人の是非は言うまでのこともないと思います。ぼくは、殺人が発生するのは社会やその殺人を犯した人を取り囲む環境が悪いからだと思

います。ですから、殺人犯とその周りの社会に対して憤りを覚えます」
佐波はその回答に一応及第点の評価をしたが、特に称賛も否定もしなかった。次にその隣の列の後方にいる吉川という女生徒を指名した。

「わたしはとっても怖く感じます。特に学校の生徒が殺されたりすると、もう怖くて学校に来ることがとても辛くなります。どうして殺人なんて起こるのだらうと思います」

担任はその回答を聞いて頷いた。

「そう吉川さんの言うように、殺人事件を見たり聞いたりすると、多くの方が恐怖心を感じますね。殺人は殺した相手だけでなく、多くの方の心にも大きな影響を与えていることが分かるでしょう。吉川さんの答えは多くの人たちの反応を代表した答えですね。では黒石君、君はどう思う？」

「先生、こんな話はくだらないよ。殺人は悪いに決まっているのに、俺たちに人殺しをするなよと教えたいのなら、最初からそう言ってくれた方がわかりやすいじゃん。それともおれが危ないと思っているのかな」
生徒の中の4、5人が「へへへっ」と笑った。そのあとの担任の対応がよかった。

「黒石君、君は戦争に徴兵されたらどうするかな？相手の国の人を殺しに行く兵隊に召集されたら、君ならどうする。みんなも一緒に考えてみなさい。第2次世界大戦のとき、多くの日本人が徴兵されて敵地に赴いた。そして、相手を殺し、徴兵された多くの人たちも亡くなった。黒石君、どう思う？徴兵を拒めば非国民として投獄、または処刑されるはずだわね」

黒石君は黙り込んでしまった。一人の反抗期の兆候を示している男子生徒が言った。

「先生、そんな質問は卑怯だよ。答えられる訳ないじゃん。なあ、黒石」
暫く教室内がしんと静まり返った。担任が言った。

「だれか答えられる人はいませんか？」

一呼吸置いて、愛子が臆せずに「はい」と手を挙げた。担任は目を丸くして愛子を指名した。祐子は驚いて胸がドキドキしてきた。愛子は立ち

上がるとはっきりした声で話し始めた。

「わたしは去年の暮れ、殺人で母を失いました」

その一言でそれまで、白け気味だった生徒全員の視線が一斉に愛子に集まった。担任も明らかに驚嘆した様子を見せた。まさか愛子がそんな目に遭っていたなどとは微塵も気付いていないようだった。愛子は続けた。

「わたしの母を殺してしまったのは、母の前の夫、わたしの父でした。わたしはその現場にいました」

ここで愛子は一瞬言葉に詰まった。涙がほほを伝わって流れた。愛子は涙を拭わず、不動の状態で話し続けた。

「わ・・・わたし・・・わたしは、その時の恐怖と悲しみの為、今でも夜は一人では眠れません」

愛子は一言一言確かめるように話した。

「わたしはその父も・・・亡くなった母も好きでした。そして・・・今の父も、今日一緒に来てくれた母の代わりに祐子さんも大好きです。・・・殺人は本当の自分を失った時に起きてしまう出来事だと思います。あの時、前の父は正気を失っていました。半分狂人のようにわたしには見えませんでした・・・その時の恐怖は言葉では言い表せません。事件が起きてしまった後には、恐怖と悲しみしか残りませんでした。恨みや復讐の心は後から湧き上がってくるものだと思います。でもわたしにはそういう感情は湧き上がりませんでしたし、今も、殺人を犯した父を恐怖と悲しみの対象としてしか見ることができません」

ここまで話すと、愛子は目の涙を手首で拭った。一部の女生徒がすすり泣きしていた。

「戦争も・・・人間の心が狂気に走った状態だと思います。正常な意識では、たとえ国家の為でも、決して人を殺しに出掛けることなどできないと思うからです。ただ、自分の意識をはっきり持たないでいると、社会の動きに流されて、戦争に加担する結果になってしまうように思えます。大勢の人たち、男性も女性もお父さんたちやお母さんたち、そしてかわいい妹や弟、赤ちゃんをだれが殺しに出掛けられるでしょう。泣き

叫び、逃げ惑う人々をだれが銃撃できるでしょう。わたしは女性ですから、強制的に徴兵されることは考えられませんが、もしそのような状態になったら、徴兵を拒否します・・・自分の命は天から与えられたものだと思いますから、もし拒否によって処罰を受けるのであれば、その時にはこの大切な命を天にお返ししたいと思います」

生徒の中には少し考え込んでいるものもいたが、ほとんどの生徒が感動した。先ほどまでツッパリを決め込んでいるように見えた男子生徒たちも項垂れている。弱い自分の姿を覚られまいとしているかの様だった。祐子も泣いた。悲しみが腹の底から突き上げてきた。担任が目頭を押さえてから拍手をした。生徒全員が拍手をした。担任が言った。

「内観さん。大変素晴らしい意見をありがとうございます。そして、あなたがそんな大変な経験をしたのも知らずにこんなにつらいテーマを取り上げてしまって申し訳なかったわ。それにも関わらず、立派に回答してくれて本当にありがとうございます。これからはこのクラスの中で、みんなと仲良く学習してってください。みんなも、内観さんが苦しみを乗り越えて頑張ろうとしていることをよく理解して、仲間として受け入れてください・・・それでは今日の道德の授業のまとめをしてみましよう。みんな、ノートを出して、今日の授業で学んだことを書いてみてください。終業まであと15分ほどありますから、書けるところまで書いて、終業後に全員ノートを提出してください」

生徒たちは鞆の中からごそごそとノートを取り出し書き始めた。少しして祐子は担任に促されて教室を出た。担任が寄って来て言った。

「素晴らしいお子様ですね。このクラスのリーダーになってくれそうな気がします。今日はお付添いご苦労様でした。終業まで職員室か校長室でお待ちになられますか？」

祐子はそれを辞退して、終業時間にまた伺うと答えた。担任は教室に戻って行った。

賢は9時5分前に東領製作所に向かった。受付で話をすると、既に連絡が入っていて、すぐに総務部に行くように案内を受けた。総務部の課長が部長以上の幹部は大講堂で行われている社長の年頭の訓示に出席し

ていると説明した。賢は社長秘書室から5つ目のドアの20畳ほどの部屋に通された。そこには奥の窓際に両袖のデスクが1つ置いてある他に細長いロッカーが壁の隅にあり反対側の壁に空の書棚、部屋の中央に会議用のテーブルと5脚ほどの椅子も用意されていた。ここが賢の執務室になるとの説明を受けた。総務部の課長はこのビルの各階の構成とセキュリティシステムについて簡単に説明すると、後ほど田辺の部下が来ることを告げて退室した。賢はデスクの席に着いてみた。机の上には新品と思われるラップトップPCが置いてあり、既にネットワークに接続されているようだった。振り返ると、椅子の背後の窓から眼下に広がる都心の景色が飛び込んできた。それはいつも見慣れた鉄とコンクリートからなる人工の造形である。外を眺めていると間もなく田辺の部下で柏崎信弘と名乗る27、8歳の色白で背の高い男性が入って来て、「楠木部長と田辺部長は社長の訓示が終わってから何う予定です」と言った。柏崎はデスクの左側の引き出しを指差して、必要な文具を用意したと説明し、今日は午後に会議が設定されていて、そこでプロジェクトの顔合わせがあると言った。賢はそこで1時間余り瞑想をして待った。少しして、まず田辺がやって来た。昨日より格段に引き締まった顔つきをしている。

「失礼します・・・おはようございます。昨日はありがとうございました。今日からよろしくお願い致します。今まで社長の年頭の訓示に出席していましたので、お待たせして申し訳ありませんでした。作成した資料と、USBメモリーをこちらに用意しました」

賢はデスクの席を立って会議用のテーブル席に着いた。田辺も賢と向かい合って座った。

「おはようございます。こちらこそよろしくお願い致します。いろいろ教えてください」

田辺は今日の午後にプロジェクトのキックオフ会議があると言った。その時、ノックをして楠木が入って来た。

「おはようございます。いよいよですね。よろしくお願い致します。わたくしはアメリカとカナダに出張していて、昨夜戻りましたので、事前

に打ち合わせできなくて申し訳ありませんでした。わたくしの企画案を用意しましたので、後ほどご説明致します。まずは社長のところに挨拶に出向かれた方がよろしいかと思えます」

賢は元よりそのつもりでいたが、楠木がそのタイミングを教えてくれたので嬉しく思った。賢は楠木、田辺に附いて社長室に出向いた。秘書室に入ると秘書が直ぐに藤代肇に取り次いだ。社長室では数人の男性が藤代と協議をしていた。藤代が手をあげて「やあ、今日からだね」と言った。

「そうだ、君たちにも紹介しておこう、今度Mプロジェクトのリーダーをお願いした内観さんだ。内観さん、こちらが一之瀬専務、そして田内常務、笹塚常務、岡崎常務、そして上月事業部長だ」

賢に続いて入室した楠木と田辺に対しては何も言わなかった。

「内観賢と申します。よろしくお願ひ致します」

賢が深々と頭を下げると、楠木と田辺も賢に合わせて頭を下げた。5人の重役はそれぞれ、軽く会釈した。

「午後に顔合わせをするから、頼むよ」

藤代肇は賢に向かって言った。賢は「はい」と返事をするので深々と頭を下げてその場を下がった。藤代は軽く頷くと、また5人との協議に戻った。賢は藤代が自分に対して何か言うつもりだったのではないかと思ったが、藤代は何も言わなかった。賢も昨年起きた出来事については口にするのを控えた。

楠木の企画案はV E A S館のような新しい施設を各県に1つずつ建て、教育的啓蒙を図ってゆくという内容がベースになっていた。アメリカのM I Tにはバーチャルな世界を作る為のロボット技術などを視察に訪れ、その後でモントリオールのバイオドームの人工的環境構築の実施例を視察するのが目的だったと言った。M I Tの技術には革新的なインスピレーションを与えてくれる技術がいろいろあったが、バイオドームの方はミニ動物園程度の印象しか持てず、バーチャルシステムという観点からは期待外れだったと言った。しかし、楠木の考え方はV E A S館のような施設の中に、バイオドームのような自然な環境をつくり、そ

このバーチャルリアリティに浸らせることで、入館者の思考方法を変えさせようとするものであることだと賢は理解した。

「今日のキックオフ会議では、僕の挨拶の後、楠木さんと田辺さんがそれぞれ用意した案を検討中の案として説明しましょう。楠木さんの案に対してはまだ、僕の見解が入っていませんが、一つの選択肢として出してみましよう。説明は僕がまとめて行います。プレゼン（公開説明）のデータを用意しておいてください」

それから三人は具体的なプレゼン方法について打ち合わせを行った。楠木の会議開催通知はステアリングの10人のメンバーの他、役員など17名に対して出されていた。実際に出席する人数はもう少し多くなるだろうとのことだった。3人は打ち合わせが終わった後、社内食堂で昼食を済ませた。楠木と田辺は次第に緊張してきているようだった。賢が全然緊張した様子を見せないで、ふたりの目には賢が頼もしいようにも見え、時として頼りないようにも映った。ふたりは賢にカリスマ性を期待しているようであった。午後の会議は1時に始まった。50人ほど収容できる会議室の長円形会議テーブルの周りには予備の椅子が持ち込まれ、溢れるほどの人で埋っていた。出席者の席の並び順は決まっているようで、社長の席が発表壇側の先頭、その向いに専務の席があった。賢は10分前に末席に座った。楠木と田辺は司会とプレゼン装置の操作を担当することになっていた。開始5分前になると出席者が次々に入室して来た。ほとんどの入室者は賢の方をちらりと見てから自分の席に着いた。中には自分の席を決める為にきょろきょろする者もいた。開始1分前に社長が入って来た。全員が起立し、賢もそれに倣って起立した。社長が着席すると、全員が着席し、一呼吸置いて司会者の楠木から開会の宣言があり、直に社長の話になった。

「皆、御苦労さま。当社の計画については今朝説明したので、分かっていると思うが、当社はこれから会社経営の舵を大きく切って、進む方向をこれまでの事業主体の企業から国益重視、社会との共栄を主目的とする企業に変身してゆくこととした。君たちの内、見識の深いものは現在わが社がどういう局面にあるか理解していることと思う。真の意味での

パラダイムのシフトが必要な時期にきている。今後も、勿論会社の発展を重視する必要があるし、プロフィットの確保も従前より一層慎重に図らなければならない。しかし、それは国家の繁栄とそこに生きる人間の繁栄の上に達成を図る必要がある。これまで企業理念として掲げていたスローガンの視点から一步前進して、実際の施策の中にその思想を盛り込む必要が出てきた。日本国は長く続いた資本主義、自由主義のもたらした結果をよく分析して、次の時代への方向付けをする時期に直面している。それにはとりもなおさず日本人の意識の変容が不可欠である。今までの物質主義偏重から脱して、精神性を軸にした豊かな社会を作る必要がある。しかし、ここで云う精神性とは、美しいものを求め、楽しいものを求め、楽を求めるような精神性ではない。日本人の心に生きている喜びを与える真の豊かさを育てるということだ。今度の国家プロジェクトであるMプロジェクトは全く新しい試みとして計画されることになった。幸いなことに当社はこのMプロジェクトの5つの基幹プロジェクトの一つ、iプロジェクトを担当できることになった。先ほど説明したようにこのMプロジェクトが日本人の精神性の改善を最終目標にしている為、これまでの企業的なセンスでは運営が難しい。このプロジェクトを推進する為には従来の規範や常識を全て捨てて、自由な発想で推進する必要がある。とは言っても、君たちのような企業戦士にとっては、それは不可能に近いことだと思う。そこで、このiプロジェクトのリーダーには外部の人をお願いした。外部と言っても、これからはわが社の社員として活躍してもらうことになる。そのリーダーを紹介しよう。内観君、こちらに」

賢は「はい」と返事をして壇上にいる藤代肇の近くまで来ると、出席者の方を向いた。

「改めて紹介する。内観賢くん。彼はまだ若いけど、人間の精神の作用に精通し、かつ国際的な広い視点でものを見ることのできる人物だ。彼の下には二人のわが社のホープを付けることにした。それが司会をしている楠木君と機械の操作をしている田辺君だ。二人の秀逸な点は今更説明するまでもないだろう。この3人の下に100人ほどのプロジェクト

実行部隊を設ける。当然それらの者は専任であり、それ以外のほとんどの関係者は兼任としてiプロジェクトに参加してもらおう。更にこのプロジェクトの進捗と方向性についてウオッチするステアリングチームを設けることにした。役員の方々にそれをお願いしてある。今日は全役員が出席している。それでは、ここで内観君に代わることにしよう」そう言って藤代肇が席に戻ると、賢は藤代に頭を下げてから壇上に上がり、全員を前にして深く頭を下げた。

「内観賢と申します。よろしくお願い致します。このたびMプロジェクトの中のiプロジェクトを担当するよう社長よりご指示を頂き、身の引き締まる思いであります。このプロジェクトの目的について、わたくしの認識としては、現状の日本人の物質偏重の考え方、意識のあり方を改め、行動の元になる意識の働かせ方にまで変容を与えるべく、その改善のための環境を提供し、その環境下での運用を可能にし、実際の日本人の意識の変革を実現することと捉えております。iプロジェクトはMプロジェクトの基幹5プロジェクトの軸となるプロジェクトとしての成果を期待されていると考えます。このiプロジェクトを推進する為に社長より2名の専任サブリーダーをアサインして頂きました。楠木さんと田辺さんを紹介させていただきます」

二人は立ち上がり、頭を下げた。

「これからは、この二人と共に実際にプロジェクトを推進する実行メンバーを選考し、共にiプロジェクトの推進を図ってゆきたいと考えております。今日の段階ではわたくしと、この2名が確定しているだけですが、私を含む三名でインフラの構想を固め、社長の承認を頂いた段階で、実行メンバーを選考させて頂きたいと考えております。わたくしのご説明申し上げている方法は多分、当社のこれまでのさまざまなプロジェクトの推進方法とは異なっていると思いますが、このプロジェクトの推進方法自体も既成概念を超えた形で進めたいと思います。それでは、まずこのiプロジェクトが達成を図ろうとするインフラとは一体どんなものなのかを例を引いて説明させて頂きたいと思います」

賢が右手を少し上げて田辺に合図をすると背後のスクリーンにプロジ

ェクト推進のマイルストーンスケジュールが映し出された。

「これが本プロジェクトのマイルストーンスケジュール（概略予定）です。実際の活動は4月1日より開始します。それまでは準備段階と位置付けます。3月1日までに企画案の承認を得、3月15日までにメンバーを確定する予定です。その後の15日間は赴任等の準備期間とし、4月1日より本活動を開始します。1年間はリサーチ（調査）期間、このリサーチ期間に企画案を確定します。それから5年間でインフラを構築し、そのあと1年間検収期間、1年間で試行期間と位置付け、本稼働試験期間として2年間で充てたいと思います。意識の変革は10年計画で考えています。10年で国民の意識の変容が始まることを意図したいと思います」

賢がまた合図を送った。スクリーンには楠木の企画案のタイトルが映し出された。

「それではインフラの企画とはどのようなものかということ、例を引いて簡単に紹介させていただきます。これが一つの例です。皆様は新宿と北海道、島根、高知、長崎にあるVEAS館をご存じと思いますが、それより一層リアルな形で意識転換の体験ができようになった施設を想定して頂きたいと思います。VEAS館では観客は目の前のスクリーンと椅子に仕掛けられている装置により、バーチャル（仮想）な体験をすることができますが、それを一歩進めて観察者自身が実際その場に居て行動しているような感覚になるバーチャルシステムを全国の主要都市に作成し、そこで多くの国民に精神を重視した疑似的な生活体験をしてもらい、その体験を通して意識の変革を図ろうとするものです。これがその一例です」

田辺がスクリーン上の画面を10秒程度の間隔で切り替えていった。賢はそのタイミングに合わせて画面を解説した。続いてもう一つの例という紹介の仕方では賢自身の案を説明した。

「もう一つの例として、実施には様々な難問の解決が必要ですが、一つのモデル地域を設定して、その特定地域に、意識がある程度精神重視の方向を向いている人たちに実際に住んでもらい、理想的な意識転換を実

現した状態を想定して生活してもらおうという方法を提案致します。実際にパラダイムを変え、精神重視の生活を続けることで、どういう結果が現れるかを観察するのです。そして、その成果をマスメディアやマルチキャスト（多重配信）、あるいはウェブを通して、全国民に知らしめてゆく方法です。この方法は時間が掛かりますが、深層までの精神変革を実現できる可能性を秘めていると思います」

田辺が賢の説明に合わせて、次々にプレゼン資料を切り替えていった。賢の一通りのプレゼンが終了すると、楠木が出席者を質疑応答に誘導した。後方に座っていた一人の男性が質問をした。その男性は能力開発室の鷲尾という部長だった。

「内観さん、ご自身についてもう少しご紹介頂けないでしょうか？」
楠木が内観に回答を促すと、藤代肇が間に入って言った。

「鷲尾くん、君は内観さんがどういう人間かということはどうして知りたいのかな」

「はい社長、わたくしはこのプロジェクトの重要性と難しさをわたくしなりに理解しているつもりですが、内観さんがどのような能力をお持ちなのか、もう少し詳しく知りたいと思いましたので、質問させて頂きました」

「君の質問がいい例になる。われわれの思考形態は、ある新しい事象に出会うと、それについて過去の事象についていろいろ考え、検討して、自分の一番納得のゆく方向に、考えを固定してゆくという習慣が身に付いている。だから君も、内観くんが君の考える i プロジェクトの進むであろう方向に合致しているかどうかを知りたいと思っているのだろう。しかし、特に今度のプロジェクトではそのようなものの考え方を外さなくてはならない。だからと言って、舵取りがしっかりできる必要があることは必要条件だし、会社としてプロフィットを確保してゆくことも絶対必要な条件になる。このプロジェクトに関しては自ら判断をしようとする前に、まず物事を客観的に見る癖を付けてほしい。しかし、そうは言っても内観君がどこの馬の骨か分からないのでは協力のしようもないと考えるのも一理ある。わたしから、現段階で紹介できる内容について

て説明しよう。彼はアメリカのフェニックス大学を卒業した後、日本に渡りWEC社の営業課長をしていた男だ。ご両親はフェニックスで医師をしている。彼はアメリカと日本の両方の国籍を持っている・・・この程度でいいだろう。いいかね鷺尾くん」

「はい、ありがとうございました」

次に先ほど社長室で会った笹塚常務が質問をした。

「内観君、君はどのようにインフラを構築していきたいと考えているのか話してくれないか？」

「はい。まだ、妥当性の検討もしておりませんので、イメージのレベルですが、わたくしは2番目に話した内容のように勧めたらよいのではないかと考えています。しかし、いろいろな方々のご意見を伺って、それを比較対照し、最適と思われるものを選択して進めるべきと考えます」

「なるほど、しかし、君が進めたいと思っている方法は、ある地域をモデル地域にして、その中で目標を実現しようとするものだろう。もし、それがうまくいかなかったら、どうするつもりかね」

「はい、そういうことも十分考えられますから、一つには試行を行っているモデルの達成度を常にモニターできるようなシステムを組み込む必要があると思っております」

「そうか、大変そうだが、いずれにしてもしっかりやってほしい」

その後もいくつかの意見や質問が出たが、賢はそつなく回答していった。会議はおよそ1時間で終了した。楠木が会議の終了宣言を行うと、ひとりの男性が賢の所にやって来た。

「技術部門を統括している岡山です。さっきの会議で質問すればよかったのですが、内観さん、わたしはインフラというから、当然何か大きな施設を作ることを想定していたんですが、先ほど常務に答えられたような特定地域を設けてそこでシミュレーションを行うとすると、当然何らかの設備などが必要だと思うのです。しかし、わたしにはそれがどんなものなのか皆目見当もつかないんです。もう少し、詳細を教えてくださいませんか？」

岡山という技術統括部長はまだ40歳代半ばの精鋭だった。賢には岡山

が意図的に接近して来ているのが分かった。

「僕自身まだ自分の考えをはっきりとヴィジョン化できていないので、確実なことは申し上げられませんが、その特定地域ではこれまでの常識を外さなければ生活できないようなインフラを用意する必要があります。例えば、これまでの貨幣による商品の販売、購入に代わる方法が必要ですし、法律の縛りを取り除きますので、それに代わる秩序の維持方法を用意する必要があります。また、この現実世界との接点にはゲートを設け、人の出入りに対する規制をする必要も出てきます。そのほか多くの仕掛けが必要になると思いますが、それが実際どのような形態で実施できるかがわかりません。でも、僕は現代の人間の意識を短期間に変える手段はそれしか無いような気がしています。実際に体験してもらおうのです」

岡山は時々頷いては、賢への同意の意思を表そうとしているようだった。それを意識的にやっていることは、直ぐに分かった。頷く時に少し唇をへの字に曲げていて、鋭く賢を見つめている目つきとの調和を欠いていた。賢は岡山の接近にやや戸惑いを覚えていたが、楠木が間に入ってくれた為、岡山に引き上げてもらうことができた。田辺は黙々と後片付けをしていた。賢と楠木は田辺を手伝い、片付けを済ますと3人で賢の事務所に戻った。事務所に入ると、3人は早速会議のレビューを行った。今日の会議は一応成功だろうという点で3人の意見は一致した。この日は年初なので、午後3時以降の勤務が免除されるとのことだった。3人は会社を引くと新橋に繰り出した。楠木が1軒の小料理屋に案内した。賢は早く愛子の元に駆け着けたかったが、この日は止むを得ないと諦めた。楠木は非常に陽気だった。田辺もかなり打ち解けているように見えた。そこで2時間ばかりの時を過ごした。賢はビールをグラスに1杯飲んだ程度だったが、楠木と田辺はグラスに4、5杯は空けていた。賢は田辺がビールをぐいぐいと飲み干す姿に男性のイメージが重なって見えた。小料理屋を出ると楠木が次の店に行こうと誘ったが、それをうまく逃れて、賢は急いで愛子の行ったはずのアメリカンバレエスクールに向かった。初日の今日、愛子の中学校転入がうまくいったかどうか

気掛かりだった。祐子のことだから卒なくこなしているとは思っていても、やはり早く確かめたかった。バレエスクールに着くと賢はすぐに教室に向かった。手拍子に合わせて「いちにっさんし、いちにっさんし」という声が教室の外まで聞こえてくる。賢がドアを開けると、先日会った雲居小百合が賢に気付いて軽く会釈した。彼女は手拍子を打って生徒を指導しているところだった。生徒たちは段違い平行棒のような補助棒に左手を置いて雲居の拍子に合わせて手や足を動かしていた。いずれも愛子より年下に見える少女ばかりだった。雲居は一区切り付けると賢の方に寄って来た。「こんにちは！愛子さんと、付添いの方いらしてますよ。そちらの奥の事務室です」

賢が案内されてその部屋に入ると、愛子と祐子が教官らしき40歳前後の女性と話をしていた。その女性も直ぐに雲居と賢が入って来たのに気付いた。

「大体、お分かりになったでしょう・・・ちょっと待ってください」その女性が言うと、愛子と祐子はふっと肩の力を抜いた。教官の女性が席を立ち上がってドアの方に歩み寄ると、ふたりもドアの方に視線を向けた。

「あっ、賢パパ」

愛子が右手を上げて振った。祐子もにっこり微笑んだ。教官が雲居に向かって言った。

「基礎的な事項については、大体説明を終えました。あとは少し体の基本的な動きを見てみたいと思うのですが」

雲居が言った。

「そうね、わたしはこの前少し見せてもらったけど、有馬教官も愛子さんの身体能力を確認しておく必要があるわね」

愛子はすぐに練習着に着替えるように言われ、更衣室に入って行った。更衣室から出て来た愛子は、テキパキとした動きをしていて、緊張の中にも澁漑とした様子が見え取れた。愛子は雲居と有馬に導かれて練習室に入って行った。賢と祐子が事務室に残された。

「祐子御苦労さま。今日の転入はどうだった？」

祐子はあらしを説明した。

「わたしも泣いてしまった。愛子さん、じっと耐えているのよ。クラスの皆の前でお母さんが亡くなった時の話をしてしまったから、もしかすると、愛子さんのことを快く思わない生徒も出てくるかもしれないわ。愛子さんを守ってあげなくちゃ。わたしね、愛子さんのお母さん役をやるわ」

「祐子」

賢は祐子に済まないと思った。賢が「結婚しよう」と言い出すのをじっと待っているのが嫌というほど分かる。それを口に出せずにいるのが機嫌に思えた。ふたりは練習室を覗いてみることにした。愛子は有馬に個人指導を受けていた。足を上げたり体を反らせたり、いろいろな形をとらされていた。ふたりの姿を認めると、有馬は愛子に向かって言った。

「愛子さん、それでは、わたくしが拍子を取るから、ア・テールとルルベを繰り返して、ハイって言ったらそこからプリエとグラン・プリエを繰り返して、そこからまたハイと言ったらア・テールとルルベに戻ってこれを繰り返しましょう。ではア・テールとルルベから、ハイ」

どうやら基本のレッスンを始めるようだった。ふたりは愛子を見守った。ふたりとも自分の娘を見ているようで、嬉しいような切ないような、なんとも不思議な心地がした。

3人がスマホの契約を済ませてアパートに帰ったのは7時30分過ぎだった。愛子は帰りの道すがらスマホをいじり続けていた。アパートの部屋に入るとすぐに麻子の遺骨の前に行き両手を合わせてから、遺骨の横に自分のハンカチを敷いてその上にスマホを置いた。祐子は愛子と協力して夕食の支度をした。愛子は麻子の遺骨の前に夕食を備えることを忘れなかった。ふたりがせっせと準備したので、8時には食事を摂ることができた。食事をしながら賢は今日の会社でのでき事をふたりに話して聞かせた。祐子は自分がどのようにこのプロジェクトに関わったらいいのかと言って、時々食事を忘れたかのように考え込んでいた。賢には祐子の心の動きが分かった。祐子の就職を藤代に頼もうと心に決めた。食事が済んで3人は暫く寛いでいたが、9時を回った頃、賢はタイミン

グを見て祐子を促して帰宅させた。祐子が渋々帰った後、愛子は食事の後片付けを済ますと、ソファーで寛いでいる賢にバレエの練習着に着替えるので、自分の姿を見てほしい、自分の足の形と姿勢を見て印象を教えてほしいと言った。賢は了解した。愛子は直に練習着を取りに行くと、戻って来てその場で服を脱いで練習着に着替え始めた。賢は自分に対して全く警戒心を持たない開けっぴろげな娘に、少なからぬ恥ずかしさを覚えた。

「賢パパ、どう、横から見てわたしの姿勢真っ直ぐかな？猫背じゃないかな？お尻が出過ぎていないかな？」

「バレエを演じる人の姿勢のことはよく分からないけど、愛子のスタイルはいいと思うよ。姿勢は、正面を見たとき少し、視線が下向きになっているように感じるけど・・・まあ、それも大して気にならないね。体の線もきれいだし、変なところはないよ。だけど、もう少し太らなくちゃあな」

愛子はソファーの背に左手を置いて、足を上げたり下ろしたりした。

「賢パパ、ありがとう。わたし嬉しくて、お母さんがいたらきっと喜んでくれるわ。でも、祐子さんが優しくしてくれるので、わたし、お母さんみたいに甘えちゃった」

この日、ふたりは寝室のベッドで休むことにした。賢はまだ愛子と一緒に寝てやる必要を感じていた。先に風呂に入ってほしいと愛子が言った。賢は愛子の言うままに浴槽に行って湯を張る為に給湯のコックをひねった。バスタブに湯が満たされた頃を見計らって賢は衣類を脱ぎ浴室に入って行った。初めシャワーを使い、それからゆっくりと湯に浸かった。賢はいつものように今日一日の出来事を逆に辿って瞑想した。愛子の声で瞑想を解き目を開けた。どうやら浴室の外に立っているようだ。

「賢パパ、わたし、ひとりでいると怖い」

賢は急いで浴室から出た。愛子が練習着の姿で自分のパジャマを手にして立っていた。賢は急いで身体を拭い、直ぐにパジャマを着た。

「愛子、続いてお風呂に入りなさい。此処で待っていてあげるから」
愛子は閉ざされた空間に一人きりで居ることに耐えられないようだ

賢は思った。

「賢パパ、わたし本当は寂しくて、悲しくてどうすることもできない。今日ね、初めてのクラスで、あの恐ろしい体験のことを話しちゃった。話してしまった方が気持ちが楽になると思ったの。でも却って悲しみが込み上げてきてしまって・・・バレエの時は忘れていたけど、こうして家に帰って来ると、とっても悲しくて、どうすることもできない。賢パパがお風呂に入ってしまったら、怖くて、怖くて、もし賢パパが居てくれなかったら、わたし悲しくて死んじゃうかも。お願いだから、今日もわたしの近くに居てね。わたし、賢パパが近くに居てくれると、とっても安心していられる。賢パパ、これからも夜はいつも近くに居てね？」

プロジェクトのことを考えると、そんなに早く退社することは難しいはずだ。賢は何とか愛子を守ってやる方法を見つけなければと思った。しかし、愛子はそんなことには考えが及んでいないようだった。愛子が出てくるまで賢は浴室の外で待った。愛子は昨日より早めに入浴を切り上げて出てきた。賢の渡してよこしたバスタオルで身体を拭くと、直ぐにパジャマを着た。二人はそのまま寝室まで行った。暖房の利いた部屋では、パジャマが熱く感じられるほどだった。賢と愛子はベッドに上がり並んで背凭れに寄り掛かった。

「賢パパ、今日も一緒に寝てくれる？」

「勿論だ。約束しただろう・・・愛子、こうして近くに居るからもう寂しくないだろう？明日も大変だからもう寝よう」

愛子がシーツをめくって中に潜り込むと、賢は一旦ベッドから下りて寝室の明かりを消した。フットライトの光だけになり、一瞬辺りが暗闇になった。閉めたカーテンの間から、遠くのビルの明かりが微かに差し込んできている。賢は暗く静まりかえった部屋の中で、愛子の意識が恐怖に飲み込まれないか気になった。やがて視力が次第に回復してきたので賢も布団の中に潜り込んだ。愛子はいつものように賢の胸に顔を埋めて来た。賢は愛子の方に向き直り、右手で愛子を軽く抱き寄せた。

「もう大丈夫だ、今日のことはみんな忘れてしまいなさい」

愛子は頷いた。暫くすると愛子は賢から離れ再びベッドを下りると明かりを点けた。麻子の骨壺の前で両手を合わせ、暫く瞑目すると再び明かりを消してシーツの中に潜り込んだ。賢は愛子が就寝前の祈りを忘れたのだと思った。

「賢パパ、ごめんなさい。わたし、煩わしいでしょう？」

賢は頭を横に振った。そして軽く愛子を抱き締めた。愛子も賢にかじり付いた。眠気も手伝って、ふたりの想念はほとんど消えていった。

「愛子、僕の心はこれからずっとおまえの心と一つだよ」

「賢パパ、こうして賢パパの腕の中になると、ほっとしてとっても気持ち楽になるわ。嬉しくて体が震えてきちゃう」

「…………そろそろ寝よう。明日からは東京での生活が本格的に始まるんだから。いろいろ大変だぞ」

「何が起きてても大丈夫。わたし、賢パパがいてくれれば生きて行ける」

「愛子、もう寝なさい」

「わたしは、将来賢パパのお嫁さんになれなくてもいいのよ。けどずっと賢パパに愛されていたい」

愛子が賢の胸に埋めていた顔を更に押し着けてきた。

翌朝、二人はほぼ時を同じくして目を覚ました。賢は愛子を愛くるしく感じ、愛子の髪をそっと撫でた。愛子は目を開けると、賢の胸に体を寄せた。

「おはよう。さあ、今日も命を頂いた。新しい一日を生きてゆこう」

「おはよう」

賢は昨夜のことは口にしなかった。愛子も黙っていたが賢がベッドから出ようとする、もう一度賢に強くかじり付いた。賢は愛子がまだ苦しみの中にあることを意識し、もう一度愛子の髪を撫でてからそっと引き離し、ベッドから降りた。明らかに、賢に対しては以前の父親に対する以上の感情を持っているようだった。愛子はベッドから降りると着替える為にパジャマを脱いで裸になった。その姿はまだ幼さを持った少女の姿に見えた。愛子は洗面所で朝の身繕いをする、朝食の支度に掛かった。何やら鼻歌を歌っている。いつの間にか淡黄色のエプロンを掛けて

いる。原と一緒に買い物に出掛けたとき、買い込んで来たものだった。暫くしてふたりはテーブルで向かい合って朝食を摂った。愛子が伏し目がちに言った。

「賢パパ、賢パパのこと「パパ」って呼んでもいい？」

「勿論だよ。僕はおまえの父親だぞ。だけど一寸恥ずかしいかな？」

「じゃあ、ふたりきりのときだけ？・・・やっぱりパパって呼んじゃおう」

「うん」

この日は愛子にとって、学校の門を潜るのが重苦しく感じられた。昨日話してしまった自分の素姓への反応が気に掛かった。愛子はクラスルームに大きな声で「おはようございます」と言って入った。クラスルームの中には既に4、5人の女生徒が来ていたが、そのうちの三人が「おはよう」と応じ、残りの二人は表情を変えずにただ、頭をちょこっと下げただけだった。後から入って来た者はほとんど、何も言わずに自分の席に着いた。多くの生徒が授業の始まるぎりぎり続々と入って来た。隣の席の女生徒も小走りで入って来て席に着いた。愛子の方には視線を向けなかった。このクラス自体が、あまり家族的な雰囲気を持っていないことが分かった。それに、少なからず自分への警戒心が含まれているのを愛子は感じた。授業の内容は愛子には物足りないものだった。先生の出す問題はすべて解けた。愛子は積極的に手を挙げた。時々指名されて回答したが、いつも正解を答えたので、先生たちも愛子に一目置かざるを得なかった。クラスの生徒も同様だった。その日は愛子が懸念するほどのこともなく一日を終え、皆に挨拶をして帰宅の途に着いた。帰りに挨拶したときは朝より反応がいいと愛子は感じた。帰宅途中で愛子はスーパーに寄った。生鮮食品売り場を歩いている時、知らない内に、賢の好きなものを探している自分に気付いた。愛子の脳裏にはいつも賢が居た。スーパーの片隅にある化粧品売り場が気になった。愛子は夕食として賢の好物のピザを作ろうと思ったが、作り方が分からなかったので安売りしている冷凍ピザを二つ買った。そのほか納豆、野菜類、ミカン、バナナを買って帰った。部屋には誰も居なかった。分かってはいたが、

誰も居ない部屋に戻るのは不安だった。部屋に入ると、ふと、書棚に置かれた遺骨に意識が移った。愛子は遺骨の前に行き、両手を合わせて瞑目した。しかし、これまでの自分と違い、体の中に何か温かいものを感じていた。それが賢であることが分かった。愛子はソファに座ると再び瞑目し、賢にテレパシーを送ってみた。

「賢パパ、パパ、愛子よ。今日は何時ころ帰ってくるの？」

賢から応答があった。

「愛子、今日は少し遅くなる。8時過ぎになるから、食事を済ませていてくれ」

愛子はすぐに応答を返した。

「賢パパ、わたし、待ってる。どんなに遅くても、一緒に食事する」
賢のこの日の一日は多忙だった。楠木と田辺に連れられて会社の関係部門に挨拶廻りをした。午前中掛かった。午後は3人で今後の活動計画について話し合った。楠木が既に叩き台を作っていたので、スムーズに事が進んだ。それでも、活動計画書の策定には午後一杯を使った。終業後、田辺が今後の行動方法について個人的なことも含め詳細に打ち合わせしたいと言ったので、賢は会社の近くのレストランで会食しながら相談することにした。愛子からテレパシーが送られて来たのは賢と田辺がレストランに向かっている時だった。賢は愛子が待っていることを思い、軽食だけで済まそうと考えた。レストランの席に着くと賢はサラダとピザを頼んだ。田辺はスープとサラダ、ステーキを頼んだ。賢が軽食しか頼まないのでも田辺は心配になったが、特にそのことは口にしなかった。食事はそれほど待たずに運ばれてきた。ふたりは食事を摂りながら今後のことを相談した。

「リーダー、これからのわたくしの役割について、わたくしなりに考えてみました。わたくしには15人ほどの部下がいました。今、彼らは研究所所長の直轄の管理下に置かれています。わたくしは途中で転籍することになりましたので、彼らに済まないと思っています。ですから、何かの機会に彼らにも、このプロジェクトに参加し活躍してもらえたらと思っています。彼らはニューサイエンス研究のエリートたちです。リー

ダーの頭の片隅にでも置いておいて頂けたらと思います」

「わかりました。いずれ、最先端の科学が必要になってくるような気がします。その時はよろしく頼みます。ところで田辺さん、今日こうして話し合いを持つ目的は、これからの詳細な計画を立てることですか？」

「いいえ、わたくしはリーダーの女房役を仰せつかりました。ですから、リーダーが行動するときにはいつも傍らに居てリーダーを支えてゆくつもりです。今日は、リーダーの個人的なことをお伺いしたいと思いました。それと、わたくしの個人的なことをお伝えしようと思ひまして」

「まあ、食事をしながら、ゆっくり話しましょう」

賢は少し間を置いて、田辺に食事をする時間を与えた。ふたりは暫く無言で食事をしていたが、頃合いを見て賢が言った。

「ところで、個人的なことというとは具体的にどんなことですか？この間、大体の話はしたと思いますが」

「いいえ、わたくしが知りたいのは、リーダーの好きなもの、嫌いなもの、強み、弱み、将来の夢、希望なんかです。そのほか、もしいらっしゃれば交際相手とか、それ以外にもリーダーのいろいろなことをできる限り知りたいと思います。勿論わたくしだけが知ってほしいのです。女房役というのはそういう役だと思ひます。できたらわたくしについてもあらゆることを知って頂きたいと思ひます」

賢は田辺がずいぶん大胆だと思ひた。どこまで女房役に徹するつもりなのか知りたかった。

「女房役と謂っても、社長もおっしゃっておられたように、あくまで業務上のことだと思ひるだけけど・・・」

「はい、わたくしもそのように受け取りましたが、でも、わたくしはリーダーの支えにならなければならないと考えたのです。ですからリーダーの生活面にまで入り込む必要があると思ひます。今は本社の事務所でお会いするだけです、今後、世界中どこへでも出掛けて行って、いろいろな環境に適応する必要があると思ひます。そういうときでも、いつもリーダーとわたくしは一緒に居ることになるでしょう。たとえばリーダーがある国で体を壊されたとします、わたくしはその時どうすれ

ばいいかを知っていなくてはならないのです。アレルギーはないか、どうしても食事が喉を通らない時、一体全体どんなものなら、朦朧とした意識の中でも口にすることができるのかとか・・・ちょっと考え過ぎかもしれないですけど。わたくしはそこまでサポートするべきだと思っているのです。わたくしの直感ですけど、このプロジェクトの成否はリーダーの双肩に掛かっているような気がするのです」

「それは僕のことを買い被り過ぎですよ。体も結構丈夫に出来ているから、田辺さんが想定するような事態になることはまずないと思うんだ。でも、あなたの真摯な姿勢には敬服します。僕のことは包み隠さず話します。僕の話の聞いたらきっと僕を軽蔑することになるでしょうけど」

「わたくしは、少しぐらいのことでは驚きません。どんなことでも」
「兎に角、食事を済ませましょう。食事の後で、コーヒーでも飲みながら話しましょう」

ふたりは暫くの間、食事に没頭した。食事が終わるとふたりはコーヒーを注文した。コーヒーが運ばれて来ると、賢が再び話し始めた。

「じゃ、僕のことを話しますね。これはあなたにだけにしか話さないから、絶対他言をしてはだめですよ・・・僕はすぐに人を好きになる性格なんです。それも、一旦接近するとかなり深い仲になってしまう。そういう性癖を持っているんです。男性に対しても、女性に対しても同じです。勿論、男性に対しては、肉体的なことでの接近はないけど」

「じゃ、女性に対しては肉体的な接近もあるんですね」

「ええ、僕は1人の女性を愛していて性的な関係も持っています。信じられないかもしれないでしょうが、その他3人の女性に対して同じような強い愛情を持っています。これはまやかしてはなくて、本当のことです。そのほか多くの女性を愛しています。あなたのことも多分、すぐに愛するようになると思います」

田辺は少し不機嫌そうに言った。

「そんなこと、時間が経たなければわからないんじゃないですか？それに、同じ時に4人もの女性を愛するなんて、自己矛盾を起こすんじゃないですか？」

「普通はそう思うでしょうね。でも僕の中では矛盾なんかありません。今も5人の女性のことがいつも心の片隅にあるんです。もし、そのうちの一人でも苦しんでいたらすぐに助けに行きます。実際そういう風に行動してしまう」

「4人じゃないんですか？」

「まだ中学生の大切な娘と高校を卒業したばかりの娘がいて、その上昨年暮に亡くなってしまった人がひとりいるんです。その人のこともずっと愛し続けています」

田辺は少し不可解そうに言った。

「リーダー、その話はおいおい伺います。どうしてそんなことができるのか、今のわたくしには理解できません」

田辺は多少非難めいた口調で言った。

「ええ、このことを理解することが僕を知る最も手っ取り早い方法なんですけど」

それには答えず、田辺は言った。

「失踪事件を解決されていらっしゃいますが、なぜそのようなことをなさろうとしたのですか？わたくしにも理解できるように話して頂けませんか？」

「いま、地球は変革期を迎えています。気付いている人は少ないけどね。物質的な面と精神的な面の両方において、不安定な状況が続いているんです。それは、大変動の予兆なんです。失踪事件もそのうちの一つです。この問題を解決することで、大変動への対応の糸口が見い出せるんじゃないかと考えているんです。だから、僕は自分の人生のほとんどの活動をそれに集中し始めたんです。失踪事件はあなたも知っていると思いますが、意識の変容の結果起きている現象なんです。人間の意識を本来的な状態に戻すことで、失踪状態からの帰還も可能になるのです」

「この話は、確かこの前も伺いました。わたくしが知りたいのは、なぜそれが必要なのかということです。特に何故リーダーがやらなければならないかということです」

「意識の問題は、思考とは切り離して考えなければならないんです。意

識は瞑想を通して見つめなくては解らない。僕は考えてそういった行動をしている訳ではないんです。使命と考えているわけじゃないんです。意識が行動を引き起こしているんです。分かりますか。これを実際に実現できるひとはそう多くはないはずですよ。僕にはそれができます」

「では、5人の女性を同時に愛するというのも、意識が行っているとおっしゃるのですか？」

「意識というより、愛。愛は意識の上であって、意識ではコントロールできません。とにかく僕は彼女たちを心から愛しているんです」

「亡くなった方もですか？」

「肉体は亡くなっていますが、存在は継続しています、永遠に」

「そういう宗教的なことは、非科学的に思えますが」

「宗教的なことではありません。事実です。それも証明できるんですよ。そのうち説明します」

「分かりました。ところで、好きなもの、お嫌いなものは何ですか？」

「特に大好きなものも大嫌いなものもありません。ただ、今日食べているようなピザは好きです。食べ易いから。それから、マグロのトロも麻子・・・死んでしまった女性だけど・・・その麻子の好物だったから、僕も好きです。それからスパゲッティのカルボナーラ、これは祐子の好物なんだけど」

「わたくしはステーキが大好きなの。でもカキは苦手、貝類はあまり好きじゃないのよ。こう見えても、よく食べるんです。でも、あまり太ってないでしょ。体質かしら」

「僕もステーキは好きです。愛子の好物だし。それに君も好きなようだから」

田辺は自然に賢の調子に合ってしまったきている自分が不思議だった。

「麻子さん、祐子さん、愛子さん、残りの3人はどなたとどなたですか？」

「亜希子と由美とゆきです。僕とあなただけの秘密にしてください。彼女たち同士も直接は知らないことなんです」

「はい、大丈夫です。わたくしはあなたの女房役ですから、他人に秘密

は洩らしません。でも、4人の中にわたくしが加わることは無いと・・・
・・・思います。仕事ですもの。でも・・・」

「田辺さん、あなたのことを話してくれるんじゃないか？」

「はい、わたくしはこの年になるまで、まだ男性を知りません。このことは絶対、誰にも内緒ですよ」

「大丈夫。あなたと同様、誰にも話さないから」

「でも、わたくしはいかにも全てを知っているように振舞ってきたのです。ですから、仕事に熱中し始めてから誰もわたくしに声を掛けなくなりました。もう7、8年になるかしら。本当はとても辛い時もあるんです。今では誰も言いませんが、オールドミスとか、行かず後家とか、最近じゃアラフォーとか、そういう年齢に近付いているでしょう。自分でもこのままおばあさんになってしまうのが悲しいんです。今回のプロジェクトに参加させて頂けることになって、もしかしたら誰かと巡り合いのような出会いがあるかもしれないって期待しているんです。リーダー、あなたのことも一時そんな風に思ったりもしたんですよ。でも、リーダーにはいっぱい恋人がいて駄目そうですね。わたくし、一方では、このまま仕事に没頭して一生を終えてもいいとも思ったりするんです。ちょっと矛盾しますけど。どうせ、こんな不細工な女ですから」

「あなたは魅力的な女性ですよ。あなたの心が壁を作っているだけだと思います。そんな風に固定的に考える必要はないんじゃないかな？年齢というのは肉体の老化の度合いを言っているんです。人間としての成長を示す年齢はそんなものじゃないと思うんです。大抵の人は60歳になっても70歳になっても12歳の頃の意識からほとんど成長していないんです。体は老化してもね。死期が近づくと、後悔が頭をもたげてきます。ああ、自分は何もしてこなかったって。だから、肉体の年齢のことは忘れた方がいいと思います。現在、只今を意識的に生きることが大切だと思うんです」

「それに、わたくし肉体的な欠陥があるんです。小さい頃、股関節が悪くて手術しているんです。ですから、骨盤の両側に大きな手術の跡があるのです。それを人に知られたくなくて、そんなこともあって男性を敬

遠してきたということもあるんです」

田辺は次第に自分を曝け出してきた。田辺自身何故ここまで包み隠さず話せるのか不思議でならなかった。

「そんなことは、全然問題になりませんよ、あなたがこんなに素敵に見えるのは、あなたの体から来ているんじゃないかと、あなたの意識が作り出している雰囲気から来ているんだから」

田辺は自分の胸の鼓動が激しくなったのを感じた。

「リーダー、そういう考え方、どうしたらできるのですか？」

「認識することから始まると思います。その認識は瞑想を通してできるんです。僕の名前じゃないけど、自分の外側じゃなくて内側を覗くんです。田辺さんはこれまで科学の世界に生きて来たからそう簡単には受け入れられないと思うけど、どうやらこの世界は実と虚とで構成される多次元世界のようなのです。人間はその両方の世界に接点を持っているんだけど、現代人はこの虚の部分を忘れ去ってしまったようなんです。だから外側の世界、すなわち物質世界ばかりに目がいつてしまっているって訳。量子の世界でも、電子が現れたり消えたり、パイロケーションのようなことが起きたりするでしょう、これは実と虚の世界の間を移動する為に起こることだと思えるんです。今の科学者は数学の上では理解できても、正しい現実が認識できていないから、全体を理解できないんだと思います」

「リーダー、その考え方、何となく分るような気がします。本当は波動方程式の解のような形で数式化できると、誰でも理解できるんですけどね」

「もうじき、それも実現するんじゃないかな。もっとも現在の数学の在り方を変える必要があるとは思いますが。たとえば数字の中に複素要素を包含させるとか、三角関数を包含させるとかして、理解の幅を広げてやるとかすれば、子供でも理解できるようになると思います」

「その考えは面白いです。数字の中に複素数を包含させる。例えば1という数字は $1 + 1i$ と考えるわけですね。そして、その実数部分は見えるけど、虚数部分は見えないとする。そうすると、今まで不可思議とし

て目を瞑ってきた現象を解明できることになるかもしれないわ」

田辺は次第に賢の言う『内側の世界』に興味を募らせていった。その一方で賢の個人的な内容についてもっと知りたいという思いが強くなってきた。

「リーダー、自然の中で何が好きですか？好きな色、好きな本、好きな曲、好きな絵、好きな女性のタイプ、好きなものを全部教えてください」

「まず、あなたの好みを先に聞きたいな。僕のと比べてみましょう」
「はい、ではわたくしから先に言います。わたくしは、自然の中では山が好きです。それと、鳥も好き。そして特に黄色系の色、どちらかというと黄緑色が好きです。好きな本は可笑しいでしょうけど大岡周平、曲はショパン、それにABBAの歌も好き。絵はやっぱリノアールかしら。わたくしって俗っぽいでしょう。案外古いのよ。最近の芸術作品は体質に合わないわ。近代芸術とか、シュールレアリズムなんてね。ヒップホップも好きじゃないわ。まだ、ロックの方がいいわ。だけどロックよりジャズね、それもモダンジャズまでだけど。好きな男性のタイプはリーダーみたいな優しくて、格好いい人」

そう照れくさそうに言って、ほんの少し頬を赤らめた。

「ぼくはね、自然の中では空、色は青、好きな本は和尚の講話集かな、曲はモーツァルト、その中でも特にKV299それと五木の子守唄、絵はシャガール、好きな女性のタイプは特にないな。逆に好きになった女性が好きな女性のタイプと思います。あなたのようなかわいらしい人も大好きです」

田辺は笑みを浮かべた。ふたりは好みについていろいろ話合った。ふたりの好みの共通点は殆ど見当たらずに思えたが、田辺は次第に賢と息が合ってきているのを感じて嬉しくなった。

賢が遠慮する田辺を鶯谷のアパートまで送った後、自分のマンションに戻ったのは8時半を回った頃だった。部屋に入ると愛子が駆け寄って来た。賢はその場で愛子を抱きしめ髪を撫でた。

「パパ、お帰りなさい。寂しかった」

愛子は目に涙を溜めている。賢は胸が苦しくなる思いだった。

「ただいま。遅くなってごめん」

「お仕事お疲れさま。パパの好きなピザよ。さっき温めたんだけど、冷めちゃったかもしれない。スープはもう一度温めるわ」

「今日は祐子も亜希子も来なかったのか？」

「パパと話したあと、6時頃電話があったわ。二人とも来られないって。家で食事会があるらしいの。わたし、今日は一人で居られたわ。パパのことを胸に描くと体が温かくなってきて、寂しくなくなるの」

「愛子、よく頑張ったな。勉強していたんだろう。これから今日よりもっと遅くなることもあると思うんだ。そんなときは先に食事を済ませて、床に着いていなさい」

愛子はスープの入った鍋の乗っているIHヒーターの電源を入れながら言った。

「わたし、待ってる。パパが帰るのを何時まででも待ってる。一緒に食事をして、一日の出来事を聞いてほしいの」

ふたりは食事を摂りながら、今日の出来事を話し合った。賢は2枚目のピザを美味しく食べた。田辺とともに食べたレストランのピザより、美味しく感じた。愛子の言うことは本当だと実感した。食事が済み、愛子が片付けを終えると、賢は愛子に先に入浴するように言った。愛子は素直に従った。この日の愛子は大人しかった。愛子が浴室に入って2、3分してスマホが鳴った。祐子だった。

「あなた、今日はごめんなさい。今部屋に戻って来たところなの。今日はどうだった？愛子さんはどうだったかしら？」

「うん、俺のほうは無事済んだよ。関係者に挨拶廻りをしたんだ。人事担当のところで、君のことを頼んどいたよ。人事部の部長が「わかりました」って言っていたから、多分入社できると思うよ。ところで、明日の夕方、愛子のバレエスクールに寄ってくれないか？帰りにふたりで夕食を済ませてほしいんだ。俺は由美さんとお母さんの三人で食事をする約束をしてしまったから」

暫く沈黙があって、祐子が答えた。

「・・・う、うん。分かった。でも、早く帰って来てね。わたしマンションで待っているから」

「分かった。愛子のことよろしく頼むぞ」

「うん・・・あなた、由美さんにあまり、近付き過ぎないでね・・・わたし・・・」

「分かっているよ、祐子。じゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい。愛しているわ、あなた。一緒にいたい・・・」
電話を切って暫くすると愛子が風呂から上がって来た。既にパジャマに着替えていて、穏やかな身のこなしでソファーに腰掛けた。賢がシャワーを浴び、部屋に戻ると、愛子は既にベッドに上がり背もたれに寄り掛かっていた。賢がベッドに上がり愛子を促して、一緒にベッドに入っても、愛子はそっと賢の胸に頭を埋めるだけで、昨日のような不安定さは見せなかった。賢はそんな愛子に哀れを感じ、自分の胸に頭を埋めている愛子を抱きしめた。暫くしてふたりは静かに眠りに落ちた。翌朝、朝食を済ますと、賢は愛子に、夕方由美に会う約束があるので、バレエスクールで祐子に会って一緒に食事をするように言った。愛子は少し寂しそうな顔をしたが、わがままを言わず素直に頷いた。ふたりは一緒にマンションを出て、地下鉄の駅で別れた。賢と愛子は反対方向の電車に乗る。賢はこの日会社では予算提出の準備をすることになっていた。まだ皆目見当も付かないプロジェクトの全予算を推定し、そこから来年度の予算を検討する必要がある。白紙に近い段階での予算検討のためには、まず事業検討案の策定から始める必要がある。賢はタフな仕事になると思った。地下鉄に乗ると賢は由美にテレパシーを送った。

「今日はどこのレストランに決めた？」

「昔、母が父と最初にデートした時、一緒に食事をしたレストランよ。テレパシーで説明するのは難しいから、わたしが会社の前までお迎えに上がります。何時に伺えばいいでしょう？」

賢が捕えたメッセージは、「昔、両親がデートしたレストラン・迎えに来る・何時に来ればいいのか」というイメージだった。

賢はテレパシーでよく、こんなに長いメッセージを送れたものだと感心

した。すぐに「6時半」と返した。この日の仕事は霧の迷路を手探りで歩くような思考ゲームに似た作業になった。プロジェクトのインフラは、昨日の段階で3人の案をミックスしたものにすることに決めていた。3人は賢の指示で先ずスタートからゴールまでの全体の流れを表すバブルチャート（ステップを記した円を線で結んで流れを示す図表）を書いた。最初は3ステップ、更にそれを10段階に分解し、全部で30ステップのタスクチャート（業務表）を作った。そのタスクチャートの各バブル（ステップ）の脇にそのタスクを実行するのに必要な予想人数と想定される必要設備名を記入していった。最後にそのチャート全体の目標確度を20パーセントにすることに決めた。そこまで作るのにほぼ1日を費やした。楠木と田辺は様々な資料を調べる為に頻繁に事務室を出たり入ったりした。しばしば賢と田辺は事務室にふたりきりになることがあった。賢はそんな時、いつも田辺が落ち着かなくなっているのを感じた。一度はコーヒーをこぼしそうになったし、また別のときには椅子に座る時、ひじ掛けに腰掛けそうになったりした。賢はそんな田辺の挙動にできるだけ気付いていない振りをした。予算検討は今週一杯続けることになっていたのも、その日は定刻に退社することができた。賢が事務所を引いたのは6時15分を少し回った頃だった。セキュリティチェックを抜けて受付を通り過ぎると、待合所の長椅子に由美が待っていた。襟にフリルのついた淡いベージュのワンピースを着ていた。いつもの地味な感じは無く、首にオパールネックレスまで掛けている。日が落ちて街路が色を失ったように見える窓ガラスに、色白の由美の姿が映って浮き上がり、天女のように透き通った感じを与えている。横には賢が修善寺で買ってあげた朱色のコートがきちんと折り畳んで置かれていた。

「内観さん」

大勢の退社してゆく社員の中に賢の姿を見付けると、由美は立ち上がり、コートを大切に手に取って小走りに駆け寄って来た。

「早いね、いつ来たの？」

「1時間くらい前かしら」

「待たせて済まなかったね」

「ううん。わたし、あなたを待ちたかったの。胸がドキドキして、とても楽しかったわ」

「今朝君と交信してから、その後は何も感じなかったんだけど、何かメッセージをよこした？」

「いいえ、あなたはお仕事でしょう。だから控えたの。本当はとってもお話ししたかったのよ。いつもそうなの。でも、わたし我慢しているの。今日は久しぶりに一緒に居られるから、嬉しくて……」

「そうだな。久しぶりだな。こうしてふたりきりになるのも、あの時以来だね。この間は無理に君を呼んだようになってしまって、居心地が悪かっただろう」

「いいえ、あなたに会えただけで、あの日は家に戻ってからも、暫くとっても満たされた感じがしていたのよ。もうわたしの意識は彷徨ってないんだもの。あなたがどこにいても安心していられるの」

「由美、ご両親の初デートの場所って言ったね。それは近いのか？」

「わたしに附いて来て、落ち着けるレストランよ。一寸楽しみでしょう」ふたりは大手町から東西線の中野方面行きに乗った。地下鉄は混雑していたがふたりが乗り込んだすぐ横の席がタイミングよく一つ空いた。賢は由美の肩を掴んで腰かけさせ自分は前に立って右手で吊革に掴まった。由美が席に腰掛けると両隣の男性が窮屈そうに少し腰を浮かせて座り直した。由美もほんの少し前傾になり腰を深く掛け直してから、賢の顔を見上げて言った。

「神楽坂で降りるのよ」

「やっとなんて教えてくれたな。そこからは？」

由美は微笑を浮かべて、右手で賢の下に降ろしている左手の4本の指先を軽く握った。賢は背後から自分達を客観視する意識に切り替えた。自分と由美が恋人同士に見える。由美の瞳は澄んでいて美しかった。4つ目の駅まで、一駅毎に混雑が増して来た。神楽坂で降りる時、賢は由美が降り易いように自分の体で人垣を押し広げて降りた。由美は賢の背中にぴったり付いて来た。

「ありがとう」

「えっ？」

「ううん、何でもない」

由美は賢が優しくしてくれるので嬉しかった。賢には何のことか分からなかった。神楽坂駅の赤城神社側の出口を出ると、外はすっかり暗くなっていて、街は夜の姿に化粧換えしていた。由美は飲食店が立ち並ぶ上り勾配の神楽坂通りを賢に寄り添って歩き始めた。5分ほど歩くと、一軒のフランス料理店の前で立ち止った。

「ここよ」

入口のドアを開けると、そこから地下に向かって階段があり、階下の奥の突き当たりにオレンジ色の照明の光が漏れている木のドアがある。賢は由美の後について階段を下りて行った。突き当りのドアまで降りると、そこを左に曲がる通路があったが、そのずっと奥にも天井に埋め込んだオレンジ色のランプで照明されたドアがあるようだった。由美がドアを開け、二人が中に入るとウエイトレスが寄って来て言った。

「ようこそいらっしゃいました。早瀬さま。お連れ様がお待ちになっておられます」

賢と由美はウエイトレスの後に附いて一番奥まで進んだ。レストランの中は薄暗く、ところどころに鮎色のランプが吊るしてあり、落ち着いた雰囲気を出している。奥のテーブルの近くまで来ると、入り口の方を向いて座っていた早瀬の母が立ち上がり、ほほ笑みながら頭を下げた。

「内観さん、いつも由美が大変お世話になり、ありがとうございます。今日はお忙しい中、ようこそおいで下さいました。どうぞお掛けになってください」

「今晚は、先日はお世話になりました。今日は、ご一緒させて頂いてありがとうございます」

ウエイトレスが後ろに立ってオーダーを待っている。席に着くと賢は全て由美に任せることにした。由美と母親は子牛のソテーをメインにしたコース料理とボルドーの赤ワインを頼んだ。すぐにフランスパンと赤ワインが運ばれて来た。ウエイトレスがワインを3人のグラスに注いで去

ると、母親が言った。

「あなたたち、とってもお似合いよ。ドアを開けて入って来た時うっとり見惚れてしまったわ」

「あらやだ、お母さんたら。まず、乾杯しましょう」

3人はグラスを合わせて乾杯した。母は乾杯に合わせて

「ふたりの未来の為に！」

と言った。

「内観さん、由美のことどうお思いですか？」

「とっても美しい、素敵な方だと思います。特に今日は、天女様です」

「由美のこと気に入って頂けたみたいね。どうかしら、この娘のこと貰ってくださいませんか？」

「はい……でも、今の僕はまだ仕事を始めたばかりで、生活力がありませんし」

賢はいきなり否定することは控えた。

「大丈夫よ、共働きならやっていけるでしょう。それでも足りなければわたくしも援助するわ」

「いいえ、それはできません……もう少し待ってください」

由美が静かに言った。

「お母さん、止めてよ。わたしたちふたりの問題なんだから」

「でもね由美、内観さんがどこかに行ってしまうないように、しっかり捕まえていなくちゃ駄目よ。内観さんはもてそうだから。わたくしだって、若かったらクラッと来ちゃうわよ」

3人は笑った。賢が母親に言った。

「お母さん、ここは思い出の場所だと伺いましたが……」

「そうなのよ。お父さんがわたくしにプロポーズした場所なのよ。それまでわたくしたちはお互いのことを全く知らなかったの。お父さんはこの先の九段にある商社R T Cに勤めていたの。今では事務系でのそういう勤務形態はほとんど無くなってしまったようだけど、その頃わたくしは派遣社員という形で日比谷にある建築会社の事務員として勤めていたの。わたくしが上司の指示で海外に輸出するプラント工場の建築図面

の半分を届けにお父さんの会社に伺ったの。どうして半分だったのかしら。その時わたくしが持参した図面を受け取ったのがお父さんだったのよ。次の日に残りの半分を届けることになっていたの。そうしたらね、わたくしが会社に戻る前に、お父さんからわたくしの会社に翌日は5時半に届けてほしいという電話があったの。わたくしは6時までの勤務だったから「翌日は図面を届けたらそのまま帰宅していい」と管理者の方がおっしゃったのね。わたくしは少し早く帰れるので嬉しかったのを覚えているわ。図面を届けると、お父さんが出て来て「少しお話したいことがあるので待っていてほしい」と言われたの。わたくしは早く帰れると喜んでいたのに、少しがっかりしたの。でも、待ったわ。30分待たされて、少し苛ついてきた時、お父さんが紺の背広に黒いカシミアのコートを着て出て来たの。とても素敵だった。わたくしは待ったことなんて忘れてしまったわ。お父さんはわたくしをこのレストランまで案内したの。今でもはっきり覚えている。テーブルも今とはレイアウトが違うけど、やっぱり一番奥だったわ。わたくしはいつもの通勤のスタイルだったけど、お父さんの姿は本当に格好いいビジネスマンだった。わたくしには不釣り合いに思えたわ。あの時の張り裂けそうな胸の鼓動を思い出すわ。席に着いて、ウェイトレスが注文を聞いて行ってしまうと、お父さんが突然言ったの。「結婚して下さい」って。他に何も言わなかったのよ。ただ一言「結婚して下さい」だけ。わたくし頭の中に花火が散ったようになって、何も考えることができなくて、黙って頷いてしまったの。うぶだったのね。何を食べたかも覚えていないわ。わたくしは雲の上にいるようだった。だって、お父さんが王子様のように見えたんだもの。わたくしはレストランから出るとき、お父さんの腕に抱かれていたのを思い出すわ。お酒も飲んでなかったのに足に力が入らなかったの。お父さんにとってはとても優しくかった。気分がよくなるまで少し休んだ方がいいと、近くのホテルで休憩したの。その日のうちにわたくしたちは結ばれて、由美、あなたを授かったの。お父さんにとってはとても素敵なお父さんだったのよ・・・あんな事件がなければ・・・」

そう言うと母はハンドバッグからハンカチを出して、目頭を抑えた。そ

こで暫く沈黙があった。賢と由美は母親の次の言葉を待った。少しして前菜が運ばれて来た。

「さあ、頂きましょう。内観さん、ワインをどうぞ」

母親が注いでくれたワインを、賢は少し口にしてから言った。

「お父さんは一目惚れだったんですね」

「わたくし、結婚した後で聞いてみたのよ。そしたら、「たぶん、そうだろうな。自分でも分からないけど、このままおまえを返すと、おまえが消えてしまうような不思議な感覚を覚えたんだ」って言ってたわ。「今すぐに一緒にになりたい」って感じたんだって。なんだかお惚気のろけみたいだけど、本当にそうだったよね。会社に居る時から抱き締めたかったって言っていたわ。いやだわたくしったら、ごめんなさいね。なんか動物的に聞こえるでしょう。でも、全然そんな感じじゃなかったのよ。ホテルで休憩した時も、いきなりわたくしに迫ったんじゃないのよ。わたくしをベッドに寝かせて、看病してくれたの。でも、わたしはどこも悪くなかったでしょう。だから、すぐに起き上がったの。わたくしもその時、この人と結ばれるって感じたの。そうなりたいて」

「おかあさん、きっとその時、わたしがお父さんとお母さんの間で生まれたって意志していたのよ」

「あらいやだ、この娘こったら、まるで生まれる前からわたくしたちを選んでいたみたいじゃないの。いやね、ほっほっほっ」

賢は由美が過去世を記憶しているということを、母親に話していないのだと思った。もしかしたら由美が、美形で包容力のある両親を選んだのだろうかと思ったりもしたが、その考えをすぐに払拭した。食事は30分ほどで終えた。食後のデザートにゴールデンキューイとイチゴのフルーツが出た。由美と母はそれをととても美味しいと言って食べた。そこにボーイがやって来て母に聞いた。

「お食事を終えられたらすぐに席を移動されますか？」

「そうね、お願いするわ」

賢には何のことか分からなかった。ボーイが一旦細い通路の奥に消え、少しして戻って来ると

「いつでも準備ができております。3番のテーブルにどうぞ」

と言った。

賢は母と由美に附いて細い通路の奥に入って行った。突き当たりにあるドアを開けると突然のピアノの音色に打たれた。驚いたことにドアの向こうは大きく開けていて、中に入るとすぐにバーのカウンター、その横がホールと続いていた。その先にテーブル席があり、奥のステージに置かれたグランドピアノを、黒い服を着た30歳前後の女性が演奏している。テーブル席とホールの間の天井には小さな電球を埋め込んだ直径1メートルほどもある照明が点いていて部屋全体を夕暮れのような雰囲気を作り上げていた。10個ほどある円形のテーブルの内、既に5つのテーブルに客が着いていた。

「ここはシャンソンを聞けるのよ。それに、このホールでダンスを踊ることもできるの。ちょっと変わっているでしょう。食事をした人は優先的にテーブルを予約できるのよ。他に、もう一つの入り口があるでしょう、あそこはレストランの入口に通じているのよ。外から直接ここに入れるようにもなっているのよ」

3人はステージの右側の端にある3という札の立てであるテーブルに着いた。

「ご主人と来られた時もこのステージはあったのですか？」

「いいえ、ここができたのはつい最近よ」

ピアノの演奏が終わって、ひとりの女性歌手がシャンソンを歌い始めた。

「この曲ご存じ？「ラストダンスはわたしに」よ」

と母が前屈みになって小声で賢に囁いた。由美は可笑しそうに微笑んでいる。女性歌手は澄んだ声をしていた。賢はその声が体全体に共鳴するように響いて聞こえた。立て続けに4曲を歌い、そのあと、観客に向けて「枯葉」を歌うと言いダンスを勧めた。その言葉を待っていたかのように2組の中年のカップルが席を立ててホールに向かった。「枯葉」の歌声が静かに響いてくる。母親がふたりに言った。

「あなたたち、踊っていらっしやい」

由美が賢の方を伺ったので、賢は会釈で答えた。ふたりは立ち上がってホールに出た。既にホールに立っている2組はぴったり体を合わせて、眠ってでもいるかのように踊っている。由美が差し出した右手をそっと賢が取って、ふたりは静かに歌声に乗って踊り始めた。由美が賢に体を寄せて来る。賢は由美が香水をつけているのを知った。

「香水付けているね」

「生まれて初めて付けてみたの。判る？」

「うん、ほんの少しだけね。君に合っているよ」

賢はふと祐子のことを思った。祐子は香水を付けることはしない。しかし、祐子の体からは鼻だけでなく全身で感じられるような、独特の芳香が感じられる。それは少し離れた所からでも、祐子の姿があればいつも賢が感じるものだった。

「賢さん、どうかしたの？」

由美は賢の意識が離れているのを敏感に覚った。賢はその言葉に由美の腰にまわした右手で由美の腰を引き寄せた。由美が言葉で話したのではなかった。テレパシーで語り掛けていたのだった。由美は寂しそうな目で賢の顔をじっと見つめている。賢はテレパシーで

「由美、とってもきれいだよ」

と言った。由美の瞳に輝きが戻って来た。ふたりが席に戻ると、母親が言った。

「あなたたち、とっても釣り合っているわ。ダンスも素敵よ」

ふたりは照れくさそうに微笑んだ。

賢はふたりを新宿の家まで、送ってからマンションに戻った。10時を回っていた。

「只今、遅くなってごめん」

「おかえりなさい」

愛子と祐子が同時に応えた。愛子が小走りで入り口まで来た。

「おかえりなさい。パパ、遅かったわね」

祐子その後から、愛子にお株を取られたと言わんばかりに、急いでやって来た。愛子が賢のアタッシュケースを受け取ると、祐子はコートを手

脱がせてハンガーに掛けようとした。その時祐子は、かすかな香水の匂いに気付いた。

「あなた、すぐに背広も着替えた方がいいわよ」

そう言うと、寝室まで駆けて行き、室内着を手にして戻って来た。賢は言われるままに背広とワイシャツ、ズボンを脱いで室内着に着替えた。

祐子は賢の脱いだ背広とコートを持って洗面台のところに行くと言った。消臭スプレーを何度も振り掛け、ワイシャツを洗濯機に放り込んだ。

「祐子どうした」

「ううん、何でもないので・・・さあ、これでよし」

そう言うと、祐子はクローゼットを開け、背広とコートを掛けた。賢と愛子は祐子がいつになく急いで行動しているようで、不思議そうに見つめていた。

「祐子さん、パパの服、何か変な臭いがしたの？」

「ううん、いいのよ。こうするときにきれいになって、さっぱりするでしょう」

「パパ、お先にお風呂を頂きました。今日は祐子さんも泊ってくれるって」

「それはよかった。祐子は風呂に入ったのか？」

「シャワーを頂いたわ。あなたも、シャワーを浴びたいかが？そうそう、後でわたしが新しい下着を入口の籠に用意しておくわ。脱いだ下着は外に出しておいてね」

賢が脱いだ下着をかごに入れてからバスルームに入ると、祐子は直ぐにバスルームの前に行き賢の脱いだ下着と靴下を洗濯機に投げ入れて、スイッチを入れた。それからゆっくり寝室に戻り、賢の着替えの下着を用意してバスルームの前に戻ってそれを置いた。洗濯機のスイッチを入れた後の祐子は、いつものように優雅で生き生きとした動作に戻っていた。

愛子は呆気にとられていた。賢がシャワーを浴びてソファのところに戻って来ると、祐子は「ちょっと待っていてね」と言って、洗濯の終わった下着をバスルームのロープに掛けて戻って来た。

「これでよし」

「ばかに手際いいじゃないか」

「今日の汚れは、今日のうちに落とすのが一番でしょう」

賢は帰宅した時から意識の中に祐子の燃えるような感情の嵐を観ていた。そしていま、それがようやく穏やかな温かさに戻ってきたのを感じた。愛子がコーヒーを3杯入れて来て、ソファの前のテーブルに置いた。3人は今日の出来事について話し始めた。はじめに愛子の話からだった。

「今日はね、隣の席の三橋さんと初めて口をきいたの。お昼にわたしが、学校の教室はどういう並びになっているか尋ねたの。そしたら三橋さん、細かく教えてくれた。でも、それから下校時間になるまで、また三橋さんとは言葉を交わさなかったんだけど、帰り際にわたしに「どこに住んでるの？」って聞いたの。わたしが答えると、彼女「わたし、浜町」って言ったわ。何でもビルの屋上に住んでいるんだって。下の方はどこかの会社が入っているらしいわ。わたしもマンションの最上階に住んでいるって言ったら、「お互い空中住居だね」なんて言って笑っちゃった。だから、今日は初めてクラスの友達と話ができてとてもうれしかった」その後を祐子が受けて話し始めた。

「その後、わたしと会ってバレエスクールに行った訳。愛子さん、もう他の人と同じような練習をしているのよ」

「祐子さん、バレエの基礎練習はベテランも初心者も同じ基礎トレーニングをするんですよ。わたしの体は、到底先輩たちのようには動かすことができないんです。だから、生徒全員一緒の基礎トレーニングの後も、わたしはそのまま基礎トレーニングを続けて、上級者の人たちはもっと難しいトレーニングをするんです」

「そうなの？でも、すぐにみんなと同じような練習ができて感心したわ」

「愛子、頑張れよ。俺も楽しみだ。ところで、夕食はどうした？」

「ええ、人形町の中華料理店に行ったのよ。中国人が経営している店で、飲茶をいただいてきたわ。楽しかったわね、ねえ愛子さん」

「はい、とっても楽しかったです。それにとっても美味しくて。あんな

風にワゴンでいろいろな料理が出てくるなんて、なんかおとぎの国に行ったみたいで、本当に楽しかった。あの海老のシューマイ、皮がプルプルしていてとっても美味しかった」

愛子は夕食のことを思い出して溜息を吐いた。

「僕も連れて行ってほしいな」

「ええ、ええ、また行きましょう。それで、あなたはどうだったの？」

「うん、今、予算会議の準備をしているんだ。暗中模索の中を具体的な金額提示をするんで結構骨だよ。でも、まだ今の段階じゃあ仕方ないことだけどね」

祐子は不満そうに言った。

「仕事のことは分かったわ。その後の食事の方はどうだったの？」

賢は祐子を傷つけないように配慮しながら話をした。

「神楽坂のフランス料理のレストランに行ったんだ。由美さんと、お母さんと3人でね。お母さんが、僕が由美さんの失踪からの帰還を手助けしたのでそのお礼だと言っていた。だから、今日は由美さんのお母さんの驕りだったんだ。落ち着いた雰囲気、美味しいレストランだったよ」

「でも、ずいぶん遅かったわね」

「うん、そのレストランの奥にちょっとしたステージと客席があって、そっちに移動してシャンソンを聞いてきたんだ」

「ふうーん」

祐子はそれ以上聞こうとは思わなかったが、愛子は興味があった。

「パパ、シャンソンが好きだったの？」

「いや僕は特に好きなわけじゃないけど、お母さんが好きなようだったな。そこはお母さんの思い出の場所だって」

「ふうーん」

愛子も頷いた。祐子はもうその話はして欲しくないとも言うかのように話題を変えた。

「あなた、わたしの就職の件どうなったかしら？」

「うん、直ぐにフォローする訳にもいかないから、もう少し待っているよ。タイミングを見て聞いてみるから」

「お願いね。わたしもずっと家にいるでしょ。だんだん体が鈍^{なま}ってきちゃったのよ」

「最近は孤児院には行かないのか？」

「時々行くわよ。あの子たちと遊ぶのは楽しいわ。でも、わたしは大人の世界で、やっぱりもっと躍動的に動きたいの」

「まあ、あまり焦るな。俺に任せておけよ」

「お願いね。父には頼みたくないから」

「でも、お父さんが知ったら、気分を悪くするぞ。一言言っておけよ」

「うん、そうする」

その時賢のスマホが鳴った。原からだった。

「内観さん、所長と会えたんですよ。所長、大分衰弱していました」

「日曜日に会ったんですか？」

「いいえ、ついさっきです。一昨日、昨日と所長を探して歩いていたんです。あのトイレの暗号に別の意味が隠されていると感じたんです。羽田空港に行って実際に落書きのあったトイレを見せてもらったんです。あの「M4F1THAI」という文字列には4つの意味が隠されているようなのです。つまりMeaningFourForOneThaiと読むんです。まず、

「Measure 4 フィート (Feet→Fit) High」と強引に読んでみたんです。そして、ドアの上方4フィートつまり1メートル20cmのところをと思って計ってみたら、ちょうどドアの上端の位置だったんです。その上のエッジに切った名刺の住所部分が画鋸で留められていました。そこには代々木のマンションの住所が印刷されていました。それから「マンションの4階 遺体」と読めるでしょう。そうなんです。以前マンションの殺人事件があった4階それが先ほどの住所にあるマンションだったんです。まだあの事件は解決していませんよね。今日、勇気を奮ってそこに行ってみたんです。4階の部屋を知らぬ素振りで、一周廻ってみたんですが、人の気配はありませんでした。事件のあった部屋はそのまま空室になっているようでしたが、どうもそこが怪しいと思いました。でも生憎そこはロックされていました。日も暮れそうなので、やむなく引き返して来たら、その途中、マンションの路地から大通りに出る角に

あるファミレスから、所長と例の5人が出て来るのが見えたんです。50メートルほど離れていましたけど確かに所長でした。こちらに向かって来るところでした。ファミレスはマンションのすぐ近くですから、多分あそこが所長の幽閉されている場所のような気がします。所長は僕に気付きませんでした。僕は顔を見られてはまずいと思い、彼らと顔を合わす前に手前の曲がり角を曲がりました。すぐ警察に行こうかとも考えましたが、夜になってしまったし、下手に動くと所長が危ないと思ったので、とりあえず一度アパートに引き返して来たんです。それともうひとつこの暗号は「3月4日、あるいは5月4日には準備が整う 羽田ターミナル1」と読めるんです。これがメッセージかどうかまだ不明ですが、そう読んでみると所長からのメッセージはこうなります。「以前に遺体の発見された代々木にあるマンションの4階に男4人、女一人のタイ人に幽閉されていて、彼らは3月4日または5月4日に羽田から飛び立つ準備をしている」という内容と受け取れるんです。僕の予想では所長は彼らに何らかの情報を与えざるを得ない状況に置かれたのでしよう。そして、彼らは既にその一部を手に入れているんじゃないかと思うんです。その情報に基づいて何かを行っていて、その結果を持って3月4日に羽田のターミナル1から飛び立つと言っているんじゃないかと思います。でもこれは所長がかなり工夫して作った文章だということを前提としています。と謂うのも、僕と所長は以前、暗号の作り方を話し合ったことがあるんです。その時に考えた暗号化方法を使っているように見えるからです。それと、彼らが羽田空港に何度か行っていることも条件になります。ただ、4という数字には気を付ける必要があると思います。たとえば3月4日というのは3月14日とか、3月24日ということもあり得ます。この推理どう思いますか？」

「僕はそこまで考えなかったな。流石に原さんだ。こうしましょう。原さんは、まだ帰還の事実を公表する段階じゃないと思いますから、明日僕が出社前に警察に行つて来ます。今、原さんが言ったことを伝えて、極秘で調査するように依頼します。所長の身が危険に晒される可能性が高いことを厳重に伝えます」

「そうして下さい。それでは、よろしく申し上げます。ところで、愛子さんはうまく学校に転入できましたか？それとバレエの方はどうかな？」

「ちょっと愛子に代わるよ」

愛子と原は10分ほど話をしていた。原は愛子のバレエについて聞きたいようだった。愛子はまだ始めたばかりだからと曖昧な返事をしていた。ふたりの電話が終えると、時計は11時5分過ぎを指していた。3人は麻子の遺骨に手を合わせて瞑目してから床に就いた。この日はベッドに祐子と愛子が寝た。愛子が祐子の胸に顔を埋めて眠りにつくと、祐子はそっと部屋を出て、賢の床に潜り込んだ。二人は無言で30分間ほど求め合い、睦み合った。祐子の体の上で賢が囁いた。

「祐子、今からテレパシーを送るから、受け取れよ」

祐子は朦朧とした意識の中で、賢の声を耳にして頷いた。賢は意識で言葉を送った。

「祐子、また、高尾山に登ろうか？俺達、シンプルじゃなくなったろう、もう一度初めの頃のふたりに戻りたいんだ」

祐子には通じなかった。ただ、祐子が

「あなた、好きよ。大好き、このまま一緒に消えてしまいたい」

という思いを発しているのが分かった。賢は祐子に口付けした。

「あなた、わたし、分からなかった。何て言ったの？」

「もう一度以前のふたりに戻ろうって言った。ふたりで高尾山に登ろう」
祐子は返事をする代わりに賢を強く抱きしめた。賢はふと横に人の気配を感じて、はっとした。

「愛子！」

賢はすぐに祐子から離れた。祐子は賢に背を向けて、すぐに夜着を整えた。祐子は言葉を失って何も言えなかった。

「パパ、パパ、こ、怖くて眠れない」

声が震えているようだった。愛子は二人のことには触れずに言った。愛子は祐子に対しては何も言わなかった。

「分かった。今行くから、ベッドに戻りなさい」

祐子は愛子の方に向けて言った。

「愛子さん、ごめんなさい」

愛子は逃げるように寝室に戻って行って、ベッドに潜り込んだ。体がガタガタと震えていた。賢は寝室に入ると、静かにシーツの中に潜り込み、丸くなって震えている愛子の肩を抱き締めた。

「パパ、もう、どこにも行かないで、いつもわたしを抱いて寝て。パパじゃなきゃいやだ」

賢が泣きながらかじり付いて来る愛子の髪を撫でていると、愛子はいつしか寝息を立て始めた。そのまま、朝まで起きることはなかった。祐子は自省の念に駆られてなかなか寝付けなかった。翌朝、祐子は3人の中で一番早く起きた。顔を洗い身支度を整えると、すぐに朝食の支度にかかった。30分ほどして愛子が起きて来た。

「おはようございます」

愛子が明るい声で祐子に挨拶した。

「おはよう」

祐子は愛子が明るいのでほっと胸を撫で下ろした。愛子は本当に何事もなかったかのように振舞っている。

「祐子さん、お食事の支度して頂いて済みません」

そう言ってから洗面所に向かった。賢は寝床で由美からのテレパシーの挨拶を受けた。まだ眠かったが起き上がった。そして、そのままベッドから出ずに隣の部屋から聞こえて来るふたりの会話を聞いていた。ふたりの中にわだかまりがなさそうなので、胸を撫で下ろした。昨夜、賢は愛子が睡眠中も意識を働かせていることに気付いた。賢が寝返りを打った時、愛子は寝息を立てながら賢の背中にかじり付くのがあった。賢自身も最近になって漸く、一晩中意識を働かせていることができるようになった。睡眠中に意識を働かせていても、昼間眠くならないことに気付き安堵したのを覚えている。朝食はすべて祐子が支度をした。愛子は出来た食事を並べるのを手伝った。賢は田辺に電話を掛け、2、3時間出社が遅れることを伝えた。朝食はやはり祐子に一日の長があると賢は思った。しかし味噌汁だけはいつもの祐子の味ではないと感じた。祐子が意

図的に薄味に作ったのだと思った。3人は一緒にマンションを出た。地下鉄駅で愛子と別れ、賢と祐子は警視庁に向かった。地下鉄はラッシュアワーだった。祐子は混雑の中での身のこなし方を知っているはずだったが、この日は吊革の無い出入り口付近に賢と向き合って立っていた。混雑してくると、できるだけ賢から離れないように体を密着させていた。電車の発車・停車の度に人の波に体を預け、賢が支えてくれるのを喜んでいて、賢には祐子が自分に甘えているのがはっきり分かった。祐子にとって愛子が現れてからできる精一杯の甘えなのだった。ふたりは市ヶ谷で有楽町線に乗り換え、桜田門で降りた。警視庁の受付で「原友昭語録研究会の所長の失踪事件について情報提供をしたいのですが」と言うと、すぐに電話連絡がされ、若い警察官が現れてふたりを会議室に通した。そこには2人の年配の警察官が待機していた。賢が、所長が幽閉されている可能性のある代々木のマンションの話をする、その理由を尋ねられた。賢は原が説明していた推理の内容を詳しく話した。捜査官達は賢の話をもとに受け取ってはいないようだった。賢は止むを得ず、自分の素姓を明かし、「所長の身の安全を確保する為に極秘に調査する必要がありますから、これから代々木のマンションに出向いてみるつもりです」と言った。すると、年配の警察官は直ぐに賢のことを思い出し「鹿児島で疾走した方でしょう」と念を押した。賢が「そうです」と言うと、やや、高飛車になって「それは警察の仕事だから、勝手に行動してはいけない」と言った。そして、若い捜査官にこの日の予定を確かめてから、その捜査官にもう一人の捜査官と一緒に張り込み調査するように指示した。若い警察官はまだ25歳前後の背の高い非常に理知的に見える男性だった。指示を受けると直ぐに部屋を出て行った。賢と祐子は警察官に同行させてもらいたいと頼んだが、受け入れられなかった。それどころか、ふたりと所長との関係について質問攻めに遭ってしまった。30分ほど釘付けにされてから漸く解放された。ふたりは警視庁を後にすると急いで代々木に向かった。^{くだん}件のマンションは路地を入った目立たない場所にあった。祐子が「わたしは顔が知られていないから、ひとりでマンションの中に入って様子を窺って来る」と言ったが、賢は

それを許さなかった。ふたりは原が言っていたファミレスに行ってみることにした。11時を回っていた。まだ客は少なく、半分以上が空席だった。ふたりは入り口から入って来る人が見え易く、相手から自分達が分かり難い場所を探した。入って直ぐ左の隅に絶好のテーブル席があった。普通は客にあまり好まれない位置である。ふたりはコーヒーを頼んで、そこで暫く待機することにした。彼らが昼食を摂る為にここに現われる可能性があるかとふたりは考えた。4組の客が入って来たが、いずれもふたりの居るテーブルには目もくれずに奥に入って行く。30分してもそれらしきグループは現れなかった。賢は田辺に連絡を入れた。どうしても出勤してくれないと先に進まないと言っていた。賢はやむなくその場を祐子に任せて出勤することにした。祐子は相手に感付かれないように店に用意されている婦人雑誌を持って来て、それを読んでいる振りをした。誌面の活字が目飛び込んでくる。どうしても読んでしまうが、それは彼女にとってどうでもいい内容のはずだった。祐子はどうしたら相手に気付かれずに、入口の監視ができるか考えてみた。雑誌をテーブルの上に置いて、下を向いて読んでいるのがよさそうだと考えた。髪が少し顔の前に被さり、相手から自分の顔が分かりにくい。それに何より、自分のことを知っているのは所長だけである。藤代が細工してくれたおかげで、自分は鹿児島島の失踪事件が解決した時もテレビには出ないで済んだ。犯人たちが祐子の顔を知っている筈はなかった。賢が会社に向かってから20分ほどして、黒いコートに身を包んだ5人の男達と濃いグレーのコートを着た一人の女性が入って来た。祐子は上目使いに彼らの方を見た。男性は5人とも顔の浅黒い、東洋系の顔つきをしている。女性は色白で男性と同じくらいの背丈である。6人は一言も言葉を発することなく立っている。女性が入口に入って直ぐの場所に設けられている順番待ちの記録帳に何か書き込んだ。まだ空席があるようで、すぐにウェイトレスがやって来て「どうぞ」と言うと、五人を誘導して奥の席に向かった。最後の一人が後ろを振り返った。祐子と視線が合った。所長だった。祐子は心臓の鼓動が急に激しくなったのを感じた。所長は祐子に気付かなかった。そのまま5人に附いて奥に入って行った。彼らの座

った席は祐子の居る場所からは見えなかった。祐子はどうするべきか思案した。心臓に「静まれ静まれ」と何度も呼び掛けた。やっと鼓動は我慢できる早さに戻ってきた。それでもまだ、どっくんどっくんという拍動がはっきり分かる。祐子はスマホを取り出して賢にメールを送った。「今、所長と5人が入って来たわ。奥の席に居る。ここからは見えない。どうしよう？」

賢からすぐに返事が返って来た。

「祐子、そのまま動くな。俺が警察に電話する。絶対動くなよ。お前のことを覚られるな」

祐子は賢の指示に従った。5人は食事に来たのに相違なかった。入口の扉が開いた。祐子はさっきと同じようにそっと視線を上げた。今朝会った警察官ともう一人の中年の小柄な男 — 多分連れの警察官 — だった。若い警察官の方は直ぐに祐子の存在に気付いたようだった。一瞬祐子に視線を固定したことで、祐子にはそれが分かった。しかし、若い警察官は素知らぬ顔をしていた。祐子も気付かない振りをした。そうするように意図されていると感じた。若い警察官が順番待ちの記録帳に名前を書くと、すぐにウェイトレスが来た。二人はゆっくり店舗内を見回してウェイトレスに何か一言言った。ウェイトレスは二人を案内して、先ほど6人が入って行った方向に向かって行った。それから何事もなく5分ほどが経過した。祐子は気が気でなかった。胸の鼓動が元の激しさに戻ってきた。じっとしていられず直ぐ賢にメールした。

「5分ぐらい前、今朝会った警察官が入って来て奥に行ったわ。わたしは何もしてないわ」

賢から、直ぐに返事が来た。

「祐子、今直ぐ店を出ろ。出たらできるだけ店から離れろ」

祐子は支払いをする為にレジカウンターに行った。下を向いて静かに移動した。支払いを済ませてからそっと奥に視線を向けた。6人が見えた。奥から一つ手前の円形の大テーブルで食事をしていた。所長は入り口の方を向いている。その横に女性が座っていた。他の4人の男性はレジに背を向けた格好になっている。警察官たちは彼らの横のテーブルでコー

ヒーを飲んでいる。その時、所長と女性が同時に祐子に視線を向けた。所長と祐子の視線が合った。所長がびっくりしたように顔をのけぞった。その途端、横の女性もそれを察して所長の方を見た。女性が4人に目配せのように首をちょっと左に動かした。急に5人が席を立つような動きを始めた。所長は躊躇している。女性が所長の腕を掴んで立ち上がらせようとした。その時、横のテーブルの二人の警察官が立ち上がった。若い方の警察官がさっと所長の横に駆け寄り、女性の手を払い退けて強引に所長を席から引っ張り出し、自分の背中に隠すような姿勢を取った。所長は夢遊病者のようにふらふらした足取りで、警察官の後ろに隠れた。その瞬間レストランの入り口から10人ほどの警察官がなだれ込んで来た。全員拳銃を手をしている。5人は身構えたが抵抗する様子はない。

「大人しく手を挙げろ」

5人は言われるままに両手を挙げた。所長は中年の警察官の背後で うずくま 蹲るようにしている。店内に居た客は全員テーブルの下に潜り込んだ。拳銃の発砲が無かったので、少しして何人かの客は恐る恐るテーブルの隅から顔を上げて様子を覗き始めた。店のマスターらしき男と、3人のウエイトレスは床に平伏したままだった。若い警察官は拳銃を持って雪崩込んで来た警察官達に向かって言った。

「署へ連行してください」

祐子は外に出る機会を失って、呆然と立ち尽していた。

若い警察官と所長を連れた中年の警察官は立ち去るとき、「お騒がせしました」と言った。その声を合図に店内にはざわめきが起こった。店長が客の処に行って一人一人怪我が無かったか確かめている。ウエイトレスの一人は腰が抜けて立ち上がれなかった。警察官のすぐ近くの床に蹲っていたウエイトレスは失禁してしまっていた。もう一人のウエイトレスは立ち上がって自分の衣類が汚れていないか確かめている。失禁してしまったウエイトレスは、スカートの汚れを気にしていたウエイトレスに連れられて化粧室に入って行き、少ししてそのウエイトレスがモップを持って来て、床の濡れた部分を拭きとってそそくさと化粧室に戻って

行った。祐子は賢にメールを送った。たった今の出来事の一部始終を書いた。直ぐに賢から祐子の安否を確認するメールが届いた。祐子の脈はやっと落ち着きを取り戻してきた。家に戻ると家政婦が「夕方話があるので、外出しないで藤代肇の帰宅を待つように」との藤代の秘書からの伝言を伝えた。祐子はそのことで、今日は自宅に居ることについてなんとなく自分に対する言い訳らしきものが出来たと思った。亜希子は琴の発表会の準備で、ほとんど家に縛り付けられている。たまには亜希子とゆっくり話をしたいと思った。

賢は一刻も早く仕事を終えて帰宅したかった。しかし、予算作成の仕事は思うように捗らなかった。やっと数字を纏める段階に至ったのは8時を回った頃だった。賢は愛子にメールを入れてあったが、帰宅が9時近くになることで愛子の不安が増さないか心配だった。しかし愛子からのメッセージは無かった。賢は祐子にメールを送った。自分が途中で中座したことを詫び、祐子が現在どうしているかと聞いた。いつも賢の意識の中には祐子の存在があったが、こういう形で祐子のことが心配になったことはなかった。ただ自分の中にそのことで戦慄を覚えるような緊迫した意識の状態が起きないので、その点だけは安心できた。祐子から返信メールが来た。自分は大丈夫で、今日は藤代肇が何か話があるようなので家に居るつもりだと言っていた。賢は原に電話を掛けた。

「内観さん、どうでしたか？」

「連絡遅れて済みませんでした。うまくいきました。所長は無事警察に保護されました。警視庁に確認したところ、所長は事情聴取と保護の為、今夜は警視庁内の保護宿舎に泊まることになるとのことでした。明日の朝、僕が警視庁に出向いて所長に会って来ます」

「ぼくも同行したいのですが、今はまだ止めておきます。所長には僕が帰還できたことを告げてください。多分あの暗号の解読のことを話せばそれだけで判るとは思いますが」

「わかりました」

賢は急いでマンションに帰った。翌朝も少し遅れることを楠木と田辺に告げた。楠木はできるだけ早く出て来て欲しいと言った。田辺はただ、

「わかりました」とだけ言った。ふたりはまとめを行うので残るようだった。賢が部屋に着くと、愛子がドアの入り口で出迎えた。

「おかえりなさい」

「ただいま。一人で大丈夫だったか？」

「う、うん。大丈夫」

言葉とは裏腹に、愛子の目に涙が浮かんでいる。賢は愛子の頭を抱き締めた。

「何か怖いことでもあったのか？」

「う・・・うん。本当は、バレエスクールの帰りに変な人に後を付けられたみたいなの。黒い服を着た体の大きな男の人だったの。地下鉄を降りた時に気付いたのよ。バレエスクールを出た時からその人のことは気になっていたの。門前仲町で降りたとき、わたしから10メートルくらい離れてその人がわたしの後を附いて来ていたの。わたしはできるだけ明るい道を歩いて来たわ。そして途中でスーパーに入ったの。買い物もあったけど、その人を撒くのも目的だったの。その人もスーパーに入って来たわ。わたしは買い物をする振りをして、生鮮食料品のコーナーを、ショーケースを見ながら歩いたの。そして魚売り場の角を曲がったところですぐに、ドレッシングなんかを売っている棚の通路に入ってそこから入口の方に戻ったの。その男の人はまだ生鮮の売り場に入って来たところだったわ。わたしは直ぐに入って来た入口から外に出たの。そこからは小走りでアパートまで戻って来たの」

「その男はどんな奴だったか覚えているか？」

「黒い服を着ていたわ。それに何か黒い棒のようなものを持っていたわ。茅場町の駅でそれに気づいたの。怖くて、体が震えちゃった」

そう言うと愛子は賢の胸に両手を当てて顔を埋めた。愛子にとってこのマンションが城になった。ここに入ると安心できた。いつ来るか分からない外界からの攻撃から自分を防衛することができた。城主の賢が帰って来ると、万軍の味方を得た思いだった。愛子が賢の胸から離れたので、賢は洗面所に行って手を洗い^{うがい}嗽をした。愛子が用意した食卓には野菜炒めとコーンスープ、シュウマイとキンピラごぼうが並べてあった。賢

は愛子が一生懸命作った夕食に喜びを隠せなかった。祐子に対してさえ滅多にしないご飯のお代りをした。愛子は賢がおかずに箸を持ってゆく度に食事の手を休め、それが箸の先から賢の口の中に消えるまでじっと見つめていていた。

「愛子、僕の顔ばかり見ていないで食べなさい。愛子の料理、なかなか大したものだぞ。お母さんに教わったのか？」

「うん、それもああるけど、学校の図書館で調べたのも結構あるのよ。パパは実験台よ。ごめんね」

「実験台大いに結構。愛子、才能があるよ。野菜炒め、この先の食堂のよりうまい。こんな実験台ならいつでも大歓迎だ」

「そんなこと言ってはだめよ。食堂の人だって、わたしと違う味を出しているのだから。他の人が食べたらきっとわたしのよりおいしいわよ」
食事が済んで、ふたりはソファで休憩した。愛子は賢の横で復習を始めた。賢は自分が横に居ることで愛子が安心できるだろうと思っていた。じっと黙って瞑目し、一日の省察を行った。この日の出来事は逆さに辿るのが難しかった。祐子との通信と会社での予算案策定が平行に流れていた。賢は両方の事象に対し意識を2分していた。2分したとはいえ自分としては両方同時に全力注入していたのだった。その中で常に愛子への意識を働かせていた。祐子へのメールでは、祐子の安全を第一に考えていた。その時の焦燥感のような状態が現前した。一旦焦燥感に駆られると思考は自分を解決に導かないばかりか、右往左往して誤った判断に誘導する可能性が大きいことが分かった。祐子を早く外に出そうと思っていた。しかし、結果的には彼女を危険な目に合わせてしまった。もう少し祐子の目で全体を観察し判断する必要がある。予算策定ではインフラ投資の具体的なイメージ策定が今一步足りないと思われた。楠木はあくまで入場者に直接影響を与える方法に固執している。賢はどうしてもその方法だけでは日本人全体の意識変革にまで到達できないと感じていた。スペースマインドトレーニングもそうだったし、ファイナルフィロソフィーもそうだった。脳レッスンに至っては逆の反応を示した者たちが多くいた。いずれも非常に大きな盛り上がりは見せたが、終

には消えた。日本人の意識は全く変わったようには見えない。だからと言って賢のイメージしようとしている特定地域でのシミュレーションは、インフラとしての具体的なイメージには至っていない。人海戦術では担当者の資質に左右されてしまう。機械システムでは受動的な人間を生んでしまう。ここでも賢は焦燥感に駆られていた。今週中に案が出来るかどうか微妙だと思った。両方の焦燥感と、愛子を一人で家に残している不安感が混在して、それぞれに向けた意識を放射線のように整然と投射することができなかった。切羽詰まった状態は自分の思考が作り出していることは分かっていたが、それを開放するにはあまりに状況が複雑過ぎた。一番問題なのは焦燥感だと気が付いた。ただ俯瞰して、判断をすればいいのだ。自分の心の流れに淀みが無かったか確認した。賢は瞑想している内に次第に右肩に圧迫感を感じてきた。愛子が頭を賢の肩に持たれ掛けてうたた寝をしていた。愛子は疲れていた。軽く体を揺すってみたが、ぐっすり寝入ってしまったようだ。ここ数日の張り詰めた生活の所為かもしれないと賢は思った。恐怖心から解放された安堵から来る疲れなのかも知れなかった。賢は愛子を両手で抱きあげてベッドまで運び、そのまま寝かせてシーツを掛けた。愛子は熟睡していた。賢は暫く添い寝していたが、愛子が完全に寝入ったと見ると、一安心してバスルームに行ってシャワーを浴びることにした。いつものように冬のシャワーは初めが辛かった。冷たい水が出てそれが足に掛かり、体がぶるぶると震えた。やがて水は次第にぬるま湯になり、腰のあたりまで競り上がって来た寒さが次第に和らいでいった。その時、急に扉が開いて愛子が服を着たままバスルームに入って来た。

「パパ、鬼が追い駆けて来るの。わたし、怖い。怖くて、怖くて・・・」

愛子は半分寝ぼけたような顔をしているが、顔は青ざめていてまるで亡霊のようだった。

「分かった。僕はここに居るから心配ないよ。すぐにシャワー済むから」

「ここに居てもいいでしょう・・・」

そう言うと愛子は子鼠のように小走りして賢のすぐ横に寄った。賢はシ

シャワーを止めた。まだ自分の身体が十分に温まっていない。だからといって愛子が濡れて風邪を引いてはまずい。賢は急いでシャワールームから出て体を拭いた。愛子も寝ぼけ眼で賢の後に附いて来た。体の温かさが次第に消えてゆく。賢は急に冷えてくる体に寒気を感じ始めた。それでも愛子を寝かし付けるのが先だと思った。何とか自分の体から湿り気を取り除くと、意外に体はまた温かさを取り戻したかのようだ。賢がパジャマを身に付けて寝室に向かうと、愛子は遅れまいとして賢に附いて来た。それからふたりで一緒にベッドに潜り込んだ。ベッドに入ると愛子は自分の体を賢に押し着けて抱き付いた。

「パパ、わたしを抱いて寝て」

「いつもそうしてるだろう」

「ううん、違うの。お母さんや祐子さんみたいに思い切りつよく・・・
・怖いから・・・とっても安心するから・・・」

賢は愛子が優しさより、強さを望んでいると思った。それは女やこどもが男に望むものだ。恐怖から逃れたい一心なのだった。賢は愛子の身体を強く抱き締めてじっと動かないでいた。やがて、愛子は寝息を立て始めた。賢は朝まで愛子を抱き締めていた。眠りに落ちながら、どうしたら愛子の心を恐怖から解放してやれるだろうかと思い巡らせた。翌朝賢は頭の痛みで目を覚ました。頭がずきずきと痛む。喉も焼け付くようで、奥の方に辛子でも詰まっているかのようだ。キッチンの方から愛子の鼻歌が聞こえている。食事の準備をしているようだ。賢はベッドを下りる時に足を滑らせ、まるで積雪が屋根から落ちるような音を立てて転げ落ちた。その音で愛子が跳んで来た。

「パパ、大丈夫？どうしたの、ベッドから落ちちゃったの？」

愛子は近づいて来て、眩暈がして立ち上がれないでいる賢の右手を取って起き上がるのを助けようとした。

「パパ、手が熱い」

愛子は賢を何とかベッドに腰掛けさせると、手を賢の額に当てた。

「熱があるわ。パパ、寝ていて。わたし、急いで食事を作っちゃうから。食事をしてからね、お菓を飲みましょうね」

まるで子供にでも言うように愛子は賢の額に自分の額を押し当てながら言った。

「愛子、今から南素の法という瞑想法で体を元の状態に戻すから、暫くこの部屋に入らないでな」

「ナンソ？」

「病気を治す瞑想法だよ」

「本当に大丈夫？・・・じゃあ、わたし食事の支度をして待ってるから」
愛子が部屋を出てゆくと、賢はまず枕を外して、体をベッドの上に横たえ、頭から順に力を抜いて行った。手足の指先まで力が抜け切ると、徐々に自分の体の重みを感じてきた。次に呼吸を整えた。呼気とともに体の中の汚れたものがすべて外に吐き出されることを意識し、吸気とともに宇宙の新鮮なエネルギーが流れ込むのを意識して、腹式呼吸でゆっくり呼吸をした。それを10分ほど続けた。頭痛と喉の痛みが自分自身でないところで起こっているような感覚を覚えてきた。次に足の裏から息を吸って、足の裏から吐くと言う呼吸法を実践した。鼻からの空気の入りは意識によって止めた。それを15分ほど行ってから、もう一度静かに腹式呼吸を行い、今度は頭の天辺に甘露の満ち溢れた南国の果実があると意識し、それが割れて甘露が頭から足の先まで、ゆっくり滴り落ちてくるところを意識した。ゆっくり、ゆっくり体全体が甘露に包まれていった。全身が甘露に包まれた状態で10分ほど動かずに足の裏の呼吸を続けた。やがて意識が冴えてきた。賢は体を起こした。頭痛や喉の痛みは消え去っていた。賢は食卓のところに行った。愛子が駆け寄って来た。

「パパ、大丈夫？」

そう言いながら、賢の額に手を当てて驚いた。

「パパ、熱、下がっているわよ。不思議ね。その、何とかの法って凄いのね」

「南素の法だ。確かに凄い効きめだよ。もう何ともない。体の機能は元に戻ったようだよ。だけど食事の後で風邪薬は飲んでおくよ。薬効というのものもあるからね」

賢は会社に向かう前に警視庁に寄った。満員の地下鉄の中で、納まっていた筋肉が再び悲鳴をあげ始めた。時々喉の奥から何かを吐き出そうともしているかのように咳が出た。その度に混雑の中の者たちは賢から顔を背ける動作をした。まるで賢が新型コロナウイルスに感染している患者でもあるかのような露骨な反応だった。警視庁では昨日の警察官が対応してくれた。直ぐに所長が引率されて来た。昨日保護されてからずっと担当警察官から調書を取られ続けていた。保護された時には心身ともに疲れ果てていたのだが、警察官はそんなことは配慮してくれなかった。所長は賢の顔を見ると口元に微笑みを浮かべて安堵の様子を現わした。

「所長、ご無事で何よりでした」

「内観さん、貴方でしたか、あの暗号を分かってくれたのは」

「久し振りに会った友人が解説してくれたのです」

所長はすぐに原のことだと覚ったようで、それ以上暗号のことは口にしなかった。暫くふたりの会話を聞いていた警察官が席を立て、部屋から出て行った。

「身体は大丈夫でしたか？」

「ええ、あいつら、俺のことを殺すことができないと考えていたんだ。もしすべて話してしまったら、多分今、こうして話をすることもできなかったらうな。微妙な駆け引きだった。タイ語はからっきし解らないし、あの女性が英語を話すんで、片言の英語で会話をしていたんだ。却ってそれが好都合に働いたんだな。言葉が解らない振りをして、肝心なことを話さない工夫をしていたんだ。だけどある程度は話をした。あなたもご存じの通り、賛助会員レベルの情報をこねくり回して話していたんだ。しかし、奴らも馬鹿じゃないから、あの手この手で情報を引き出そうとしていた。最初は俺をタイまで連れて行って、一戸建てリゾートマンションのハーレムのような所に閉じ込めたんだ。そこがどこかは分らなかったけど、どこかの海岸のようだった。海に面していたからね。3日ほどして連中、そこに俺を置き去りにして消えてしまったんだ。それから1ヶ月近くもそこに居たんだけど至れり尽くせりだった。人には

話せないような待遇を受けたよ。僕も年はとって男だから、若い女性の接待になんとか夢の中の世界に生きているような錯覚を起してきたよ。初めはふたりの女性と同棲しているような生活だった。一人は25、6歳、もう一人は32、3歳ってところだった。閉じ込められてはいても、別に誰も監視しているわけじゃなかったけど、外に出てみても何も建物がなくて、その建物だけしか見えなかった。20坪くらいある平屋の1部屋だけの建物だった。水は大きなドラム缶が外に置いてあって、そこから必要な分だけ掬って使うようになっていた。食料は乾燥食と缶詰と麻袋に入ったタイ米が1袋置いてあった。それだけだ。そこに若い女性と3人きりだったんだ。はじめの2、3日は物珍しさもあって、どうせ身寄りも無くなったことだし、このままここで死んでしまってもいいとさえ思ったけど、自分の責任の重さを感じてきて何とか鹿児島と連絡を取れないかと思い直して、一度建物の外に出て辺りを廻ってみたんだ。いろいろ調べてみると、そこは海に面した1軒屋で、両側が垂直の崖になった、入り江のような砂浜に建っているということが分かったんだ。海岸の家の裏手は森になっていた。その森には人の入って行ける様な道は無かった。だからボートでここに連れて来られた時、幽閉されたという絶望感がひしひしと感じられたんだと思う。一度森の中に入ってみようと思って、灌木を掻き分けて2、3メートル入ってみたけど、中は薄暗くて、じとじとしていて、鳥肌が立つような恐怖感に襲われたんだ。すぐに引き返して来たよ。そんなとき、その若い女性たちは何も言わずに灌木で傷付いた手足を手当てしてくれた。気温は高く、上半身は裸でなけりゃ過ごせなかった。午前中は日差しを避けて部屋の中に居たけど、夕方になると2日に1回くらいの頻度でスコールが来る。冷房なんて無かったけど、スコールのある日はそれで結構涼しくなったよ。窓は棧だけで硝子戸も、雨戸も無かった。夜はとて一人では過ごせない、ふたりの女性が沈黙していると、海の波の音が次第に大きくなってくるような気がして、体の底の方から恐ろしさが湧き上がってくるんだ。ふたりの女性も同じような感覚を抱いていたようだ。彼女たちも脅されたか、騙されてここに連れてこられて閉じ込められたんじゃないか

と思った。そんな中での生活だった……」

その時、先ほどの警察官が戻って来た。

「どうですか？お話は済みましたか。これから馬場さんの今後についてすこし相談しましょう。内観さんが身元引受人ということにしてもよろしいでしょうか？」

「勿論です。是非その様にお取り計らい頂きたいと思います」

賢は警察官が渡してよこした書類に必要事項を記入し署名した。馬場の安全確保の為、引き渡しは3日後ということになった。その間、警視庁で誘拐犯についての調査を進めるとのことだった。所長は警察の宿泊施設に逗留することとなった。賢は警視庁を出ると、また激しい頭痛に襲われ始めた。それでも何とか会社の事務所に辿り着いた。その日の仕事は辛かった。朝、南素の法で抑えた体の状態は、昼ごろになると完全ににぶり返してきた。熱は出なかったが、全身がだるく喉の痛みと頭痛が思考力を減退させている。賢は楠木と田辺に頼らざるを得なかった。田辺が賢の意図を企画案に展開する役目を受け持っていた。楠木はまだ、自分の考えを何とか採用してほしいようだった。出来上がった案を賢に説明すると、経理に監査してもらおうと言って部屋を出て行った。賢と田辺はそのまま企画案とインフラの想定価格案の策定を続けた。午後になって田辺が賢の体調不良に気付いた。質問した時の賢の反応が少し遅いと感じていた。

「リーダー、体調悪そうですね。風邪ですか？わたくし、薬を買ってきます」

そう言うと、田辺は部屋を出て行って、4、5分してグラス一杯の水と、錠剤の入った瓶を持って戻って来た。直ぐに瓶から3錠の錠剤を取り出すと、水と一緒に賢に渡した。田辺の頬に笑窪が浮かんでいる。賢は田辺から受け取った錠剤を水と一緒に胃の中に流し込んだ。

「ありがとう。田辺さん、企画案Bのインフラ企画をブレイクダウンした一覧表をもう一度確認したいんだけど」

「はい、リーダー最初から順番に説明致します」

田辺は自分の椅子を賢の方に近づけて座り直すと、A4の薄いファイル

を賢の前に開き、身を乗り出し加減にして説明し始めた。賢は田辺が初めに開いたページの一覧表がいつものようにさっと脳裏に展開されて来ないことに気付いた。必死に意識を一覧表全体にフォーカスした。トータル金額は4770億円となっている。いつもなら問題点が浮き上がって来るのだが、どうしてもトータル金額に至る各設備のイメージが湧き上がって来なかった。田辺が一生懸命説明している。その声も詩の朗読にしか聞こえなかった。賢は田辺が一覧表の上を走らせている右手の手首を自分の右手で掴んだ。

一瞬田辺は言葉を失って賢を見つめた。賢の顔がすぐ目の前にあった。目が獲物を追う豹のように血走っている。賢は目の語ることは全くかけ離れて口元に微笑を浮かべた。田辺は顔が熱くなるのを感じて、目を賢から逸らせた。しかし田辺は急に激しくなった鼓動を意識しながら、そのままじっとしていた。賢の頭がふらっと宙を彷徨い、額をテーブルにぶつけた。田辺は賢の手に、朝買った缶ホットティーの感触を思い出した。賢の体から遠赤ヒーターのようなカッとした熱が感じられた。

「リーダー、大丈夫ですか？熱がおありのようですが」

賢は何も答えない。ゼーゼー音をたてて息を吐いている。

「リーダー、リーダー」

「あ、ああ、田辺さん、す、少し休憩しよう」

テーブルから頭を持ち上げ、呂律の回らない舌で無理やり言葉を吐き出し、賢はそのまま椅子の背もたれに体を預けた。田辺は賢の右腕を自分の肩に回し、賢を抱き抱えるようにしてソファに連れて行き、横にさせた。賢は田辺の右手を取り「ありがとう、ゆう・・・」と言いかけてそのまま意識を失ってしまった。田辺は急いでトイレに行き、自分のハンカチを水で濡らして戻って来て賢の額にそれを乗せた。ハンカチはすぐに冷たさを失い、生ぬるくなり、やがて湯気を立てた。田辺は走って部屋を出ると医務室に向かった。医務室には60歳前後の両頬に10円玉ほどのシミのある当直医がいて新聞を読んでいた。

「うーん、患者に来てもらわないと何とも言えないな。兎に角体温を測って来てください」

「でも、先生、すごい熱みたいです。彼、苦しんでいます。動けないんです」

「体温計で測らなくちゃ分からないだろう。君の勘違いかもしれないし・・・」

そう言うと医者^は田辺に体温計を渡した。田辺はそれをひったくるように受け取ると急いで厨房に向かった。タオルを2枚水に浸して走って部屋に戻った。部屋に入ると賢がソファーに腰掛けていた。

「田辺さん、ありがとう。おかげで治ったよ」

田辺は啞然とした。まだ、部屋を出てから10分も経っていない。

「リーダー、大丈夫ですか？」

田辺は賢の近くに駆け寄ると、体温計を渡した。

「当直医が体温を測れって言っていました」

賢は言われる通り体温計を脇の下に差し込んだ。

「もう大丈夫だ。田辺さん、ごめん。昨夜ちょっと油断してしまって。僕の失態だ・・・ほら、もう平熱だ」

体温計を脇の下から取り出してそれを田辺に渡した。

「風邪じゃなかったんですか？」

「いや、たぶん風邪だ。君のくれた薬が効いて来たんだよ。それに今、南素の法をやったから、体も元に戻った」

田辺は小首を傾げて唇をかんだ。ふたりは元の席に戻るとレビューを再開した。それ以降賢は調子を崩すことはなかった。楠木が経理部の監査を受けて部屋に戻って来た。賢と田辺が顔を近づけて検討をしているのを横目で見ると、無言で賢と向かい合った席に座った。

「楠木さん、経理部は何と言いましたか？」

「はい、第1段階としてはまあいいだろうということでした。しかし、次の段階では各設備に具体性を盛り込む必要があると言っていました。たとえば、カタログとか図面とか概要の分かるものが必要だと言っています」

「リーダー、わたくしもそう思います。次の段階ではTDのヒアリングがありますから」

「田辺さん、そちらで策定した設備額は5、000億円規模でしたね。次回には見積もり部門に試算依頼をする必要があると思います」

「勿論そのつもりです。楠木さんはもう依頼したんですか？」

「ええ、ここに来る途中で依頼して来ました」

賢が言った。

「両方の企画案の合計が7000億円ほどになるから、1次裁定が下りたらかなりの人員が必要になってくるな」

その日、3人は午後9時頃まで細部の詰めを行った。9時を回ると賢は田辺と一緒に体温計を返しに医務室に寄り、そのまま退社した。楠木はまだやりたい仕事があると言って残った。賢は遠慮する田辺をタクシーでアパートまで送った。タクシーを降りる時、田辺は「リーダー、体は大丈夫ですか」と言って、賢の額にさっと右手を当ててから恥ずかしそうにタクシーから降りた。賢が自分のマンションの入口のドアを開けると、昨日と同じように愛子が飛んで来た。

「パパ、風邪治ったの？今日は大丈夫だった？」

「うん、もうすっかりよくなったよ」

テレビの大きな音が聞こえる。賢は愛子が寂しさを紛らわせようとしていたことを直感的に覚った。愛子は賢にしっかり寄り添って離れなかった。時計は間もなく10時になるろうとしている。和食が用意してあった。愛子は直ぐに湯豆腐を暖めにかかった。賢はソファに腰掛けテレビのドキュメンタリー番組に意識を向けた。アジアの民族問題についての番組のようだった。政府当局によって弾圧され、僧侶たちが焼身自殺し、苦しみながら死んでゆく庶民の映像が映し出されていた。賢は意識の奥に悲しみの感情が蠢いているのを感じた。それはテレビの映像から来るものだけではなかった。誰かが自分に向けて発している感情でもないようだったが、賢の意識を捕らえて放さなかった。賢は先ず祐子のことを考えた。しかし、激しい悲しみが祐子にあるはずも無い。亜希子を思ってみた。亜希子からは「会いたい」という感情が伝わってきた。しかし、それも激しい悲しみではなかった。由美にテレパシーを送ってみた。暖かい喜びの気持ちと共に「今度のお休みに会いたい」というメッセージ

を送ってよこした。愛子からも麻子からも悲しみの感情は伝わって来ない。

愛子が賢を呼んだ。食事の支度が整ったようだった。テーブルの上には湯豆腐の鍋が置かれていて、マグロの刺身、ほうれん草のお浸し、煮豆が並べられている。湯豆腐はまだIHヒーターから下げたばかりのようで、鍋の中でくつつ音を立てて踊っている。愛子は料理の出来上がりに満足しているようでニコニコしていた。賢がふと骨壺の方を伺うと、そこにはいくつかの小皿が並べられていて、テーブルの上の料理が縮小されて備えられている。湯豆腐も湯気を立てていた。そこには悲しみは感じられなかった。賢は愛子と共にこの日の出来事を話しながら食事を楽しんだ。しかし胸の奥にある悲しみの感情が段々大きくなってきている。食事が済み片付けを終えると、賢は愛子に風呂に入るよう促した。愛子が浴室に姿を消すと、その場で瞑想に入った。悲しみの感情は祐子から出ていた。賢はスマホを取ると、祐子に電話を入れた。

「あなた、わたしよ。どうしたの？ 所長さんはどうだった？」

祐子の声に悲しみの響きは無かった。しかし賢は祐子が何か隠していると感じた。自分に隠すような内容に思い当たるものは無かった。

「所長に会えたよ。やはりタイの無人島に幽閉されていたようだ。警察はまだいろいろ調査したいようで、3日後に開放して貰えることになった。それより祐子、何か問題でもあるんじゃないか？ 元気がないぞ」

「なんにも。わたしは元気よ。それより愛子さん大丈夫？」

祐子から出ていると思った悲しみの感情は、多分自分の感覚の乱れだと賢は思った。祐子との電話を終えると、愛子が湯から上がって来た。

「パパ、誰と電話していたの？」

「祐子だよ」

「原さんにも電話するんでしょう」

賢はうっかりしていたと思った。原が待ち侘びているはずだった。

「内観さん、所長に会えましたか？ どうでした？」

原は直ぐに応答した。

「はい、元気でしたよ。やはりタイの無人島に幽閉されていたようです。」

誘拐犯は所長を骨抜きにする作戦だったようだけど、所長の意思は変わらなかったようです。原さんのことも多分気付いたと思います。警察の中だったからはっきりと意思表示するのは難しいようでしたが、3日後に開放されます。僕が身元引受人になりました。所長は一時僕のアパートに来てもらいます」

「3日後ですね。僕も一緒させてください」

「はい、一緒に迎えに行きましょう」

電話を終えるとソファから身を乗り出して覗き込んでいる愛子と視線が合った。

「パパ、今日ね、クラスの委員長がわたしのところに来ていろいろ話したの。生徒会って謂うのがあるらしいのよ。委員長は生徒会の会長も兼任しているんだって。和歌山の中学校には無かったわ。それでね、わたしに生徒会に入らないかって言ったの。わたし、バレエを習うから放課後は時間が無いって言ったらとても残念がっていたわ。それでね、先生がクラブ活動は全員しなくちゃならないって言っていたの。だから、少し考えさせて下さいって言ってきたの。ねえ、パパ、どんなクラブに入ったらいいと思う？」

賢は疲れの中で、愛子の声がラジオから流れてくるディスクジョッキーの声のように感じられてきた。ふと気付くと、賢は自分が愛子の膝の上に頭を乗せていることに気付いた。すっかり眠り込んでしまったのだった。賢は頭を上げながら言った。

「愛子、今何時だ？寝ちゃったのかな？」

「もう12時を回っているわ・・・パパ」

愛子も眠そうな目をして言った。「パパ」という言葉は夢の中で話しかけられているように響いた。賢は意識を覚醒させて、愛子の肩に手を掛けた。愛子は賢の腕の中に体を委ねて来て、賢の背に手を廻した。賢は愛子を身体ごと抱きかかえてベッドに連れて行った。片手で愛子を支えながらベッドカバーを跳ね除けると愛子をベッドに横たえた。愛子は腰から静かにベッドに横たわったが、ベッドに沈む瞬間、賢の肩に掛けていた手に力を込めた。賢は引き込まれるように愛子の横に倒れ込んだ。

ふたりはそのまま眠りに落ちた。

翌朝、ふたりはいつもの通り地下鉄門前仲町駅で別れた。賢の一日はかなりハードだった。この日は楠木、田辺と共に企画部門のトップや経理部門に対して0次予算案の説明を行った。ストレートには受け入れられなかった。いくつかの修正を要求された。3人は午後9時過ぎまで検討を進め、何とか修正案を纏めた。この日は3人一緒に退社した。賢は田辺を鶯谷まで送った。田辺は賢にどうしても見せたいものがあると言った。賢は田辺のアパートに立ち寄ることにした。まだ体調が完全に回復し切っていなかったので時々ふらふらと倒れそうになったが、必死に堪えて歩いた。早く帰りたかった。田辺の部屋に着くと、勧められてソファに腰を下ろした。田辺はコーヒーを入れると言ってキッチンに立った。賢は暫く瞑目して待とうとして、そのまま寝入ってしまった。ふと気付くと愛子が自分の肩を揺り動かしている。賢は起き上がりながら愛子を抱き締めた。愛子が賢の腕の中で逃れようとしてもがいた。賢は愛子の髪を撫でて、優しく額に口付けをした。愛子はもがくののを止めて、賢の背に手を回して、賢の抱擁に身を任せた。

「チーフ……………わたくし……………」

賢はハツとして愛子の顔を見た。田辺だった。賢は田辺を離した。

「あっ、済まない。寝入ってしまったようだ。娘と間違えてしまった」

「い、いいんです……………わたくし……………」

「本当に済まなかった。ところで、僕に何か見せたいって言ってただろう？」

「もういいんです。本当は、チーフがとてもお疲れのようでしたから、少し休んで頂こうと思ったのです。昨日の今日ですから」

ふと気付くと賢の膝には毛布が掛けられていた。

「田辺さん、ありがとう。君、優しいんだね」

「コーヒー冷めちゃったから、もう一度入れなおします」

「いや、僕はもう帰るよ。今何時？」

「1時を回ったところです」

「そんなに眠ってしまったのか。でも、起こしてくれてありがとう。直

ぐに帰らなければ」

「チーフ、今夜はここにお泊りになられてはいかがですか？もう電車も無いし」

田辺は賢に抱き締められた感触が残っていて、もう暫く賢と一緒にいたかった。しかし賢は引き止める田辺を振り切って、外に出ると急いでタクシーを拾ってアパートに戻った。扉を開けると、テレビの音が聞こえ、明かりが煌々と点いている。愛子がソファでエプロンを掛けたまま寝入っていた。テーブルの上には愛子の作ったと思われる八宝菜とコロケが手を付けてないままになっていた。賢は愛子に恐怖を感じさせてはいけないと思い、愛子の顔の前に屈みこむと、そっと髪を撫でて耳元で囁いた。

「愛子、ただいま」

愛子は目を閉じたまま、賢の首の周りに両手を回した。眠ったまま意識を保っているようだった。愛子の目から涙が流れ落ちた。賢は愛子を抱きかかえると、ベッドまで運び横たえた。愛子は目を瞑ったままベッドの上に起き上がりエプロンを取り去りそのままベッドにうつ伏せになった。まだ目を瞑っている。賢は自分と愛子のパジャマを持ってきた。愛子は服のままベッドカバーの下に潜り込んでいた。そのまま眠っているようだった。賢は愛子のパジャマをベッドの脇に置き、自分はパジャマに着替えた。幸い部屋は十分に暖かかったので、部屋の明かりを消してそのままベッドに潜り込んだ。暫くして、愛子が賢の胸に体を寄せてきた。賢は愛子の肩をそっと抱き締めた。賢の意識に麻子が蘇ってきた。翌朝は昨夜の料理をレンジで温めて食べた。愛子は料理のことは何も言わなかった。

「愛子、昨日は遅くなってごめん。会社の人の家でつい眠ってしまったんだ。気づいたら1時だった」

「パパ、わたくしこそごめんなさい。一生懸命起きていようとしたのよ。でも駄目だった」

「愛子、帰りが遅くなるって電話を入れるようにするけど、もし9時を過ぎても帰って来ないようだったら、先に食事を済ませて寝ていなさ

い」

「だめ、怖くて眠れないもの。パパが戻るまで起きているわ」

「そうか、それじゃあ、8時を過ぎたら必ず電話するよ。その時にどうするか決めよう」

祐子から電話があった。

「あなた、おはよう。今日お話したいことがあるの。いつでもいいから、仕事終えたら電話をくれる？」

いつも耳にする朝のはちきれんような声ではなかった。賢は祐子の元気の無さが気になった。会社に着くと先ず田辺の席に出向いた。田辺は賢の姿を見ると、目を逸らせて赤面した。賢は昨日の不始末を詫びた。楠木が来ると3人は昨日作成した0次予算案のレビューを行った。この日もまた、経理部、企画トップとの折衝に追われた。やはり承認は得られなかった。また、0次案を策定し直さなければならなかった。仕事を終えたのは9時半を回ったころだった。愛子には連絡を入れたが、どうしても待つと言って聞かなかった。賢は祐子に電話を入れた。

「もしもし、祐子、今日は遅くなったから、明日にできないか？」

「あなた、愛子さんも待っているでしょうから、仕方ないわね。明日は必ずよ」

「分かった。何か大事な話でもあるのか？」

「明日、会ったときに話すわ」

「そうか。じゃあ、明日な」

「あなた、おやすみなさい。愛しているわ・・・とっても」

祐子の声に、今朝と同じように弾みを感じられない。賢は祐子が心配になった。田辺が賢の電話が終えるのを待つて言った。

「チーフ、今日はわたくしひとりで帰ります」

「いや、家まで送るよ。夜遅いから」

田辺は否定しなかった。少し視線を落として軽く頷いた。ふたりが田辺のアパートに着いたのは10時を回った頃だった。賢は田辺をアパートの前まで送るとそのまま帰宅の途に着いた。少ししてアパートを振り返ると部屋の窓が開いていて、明かりでシルエットになった田辺が窓から

見つめていた。賢は手を振った。田辺は頭を下げ急いで窓を閉めた。賢は愛子に電話を掛け、直ぐに帰ると告げた。マンションに着くと愛子がドアの傍に立って待っていた。賢が入って来ると愛子は賢に抱きついた。賢は愛子を軽く抱き締めてそっと放そうとしたが、愛子は離れなかった。賢は暫くそのまま愛子を抱き締めていた。

「怖かったの。誰かが来たの。ドアをノックしたの。何度も、何度も」「えっ？　だけど、セキュリティでゲートを通れないはずだろう？　呼び鈴は鳴らなかったのか？」

「ううん、ノックだけだった。わたし怖いから、ドアフォンで返事もしなかったの。このマンションの中の人かもしれないわ」

「もう大丈夫だよ。安心しなさい。さあ、ソファーに行こう」

賢は愛子を抱きかかえるようにしながら、ソファーに行き愛子を腰掛けさせた。愛子は漸く落ち着いてきた。賢が着替えを済ますと、ふたりは直ぐに食事を始めた。10時50分を回っていた。愛子は賢に甘えた。夕食も賢の隣に椅子を移して食べた。愛子は既に入浴を済ませていた。賢は食後直ぐに入浴した。賢がシャワーから戻って来ると、愛子は待ち兼ねたようにベッドに潜り込んだ。ふたりは疲れを感じていた。愛子は賢の腕の中で、賢をこの上なく大切な人だと思った。ふたりが寝入ったのはそれから間もなくだった。

翌朝、愛子はいつものように心地よい眠気の中で目を覚ました。ただ違っていたのは、目を覚ました時、自分と賢とが抱き合ったままだったことだ。その時は流石に恥ずかしさに顔が熱くなるのを感じたが、それより賢に対する愛おしさが強く込み上げてきて、それを振り切るようにして起き上がった。賢も愛子の動きで目が覚めた。

「おはよう、愛子、風邪、移らなかったか？」

「えっ？　・・・うん、平気よ。パパ」

愛子は昨日の恐怖のことはすっかり忘れていた。ふたりは朝食を摂り、家を出て、門前仲町駅で別れた。愛子は不思議な感覚で一日を過ごした。何時も賢の姿が頭から離れなかった。授業中もボーっとしていた。先生の言葉が意識に絡まなかった。下校までに3度も注意を受けた。この日

はバレエのレッスンがあったが、身が入らず指導教官に何度も叱られた。それでも何とか練習をこなすと、いそいそと帰宅の途に着いた。マンションが近付くと胸がわくわくしてきた。しかし、それと同時に体にぞくぞくとする戦慄を覚えた。愛子は急いでセキュリティゲートを通り抜け部屋に向かった。誰かが追ってくる。愛子は急いだ。姿は見えないが、次第に靴音が近付いているのが分かる。愛子が部屋に駆け込んでドアをロックし更に鎖を掛けると、すぐにドアをノックする音がした。愛子は背筋が凍り着いた。ノックは初め3回、続いて4回、更に5回と続けざまに聞こえて、暫く時間を置いてから、また5回を2度繰り返した。声はしなかった。愛子は体が小刻みに震えて来るのが分かった。それから靴音が遠ざかって行った。少しして、別の靴音が部屋の前を通り過ぎた。愛子は靴を脱ぐと、静かに部屋の奥に進み、ソファにそっと腰掛けた。震えが止まらなかった。愛子はそのままベッドに行きシートの中に潜り込んだ。冷えていた体が温かみを感じてきた。昨日賢に抱かれて寝たことを思い起こした。賢の厚い胸が現前した。体が熱くなり、何時しか震えが止まった。愛子はそのまま寝入ってしまった。

賢の一日は忙しく終えた。漸く0次提案が受け入れられた。50ページにも及ぶ内容だが、一通り説明して、企画部門のトップと経理部門の了解を得た。「祝杯をあげましょう」と言うふたりの提案に詫びて、急いで退社した。祐子の待つ八重洲の地下街に向かった。祐子はベージュのセーターと紺のスカートの上に遠野に行ったときと同じ白いコートで羽織ってJR中央駅の八重洲地下街への出口に立っていた。賢の姿を見ると手を振った。

「祐子、待たせたか？」

「ううん、今来たばかりよ」

賢は祐子の周りにいつもの金色の輝きが見えないことに不安を覚えた。ふたりは少し歩いた。祐子は賢の左腕にしっかりと自分の右腕を絡め、左手で自分の右手首を握った。賢から離れまいとしているようだった。ふたりは2ブロック先の角の喫茶店に入った。席に着いてコーヒーを頼むと、賢が言った。

「どうしたんだ？何か変だぞ。いつものおまえらしくないぞ」

「分かるわよね。ねえ、わたしが遠くに行ってしまうても大丈夫？寂しくない？」

「どういうことだ？」

「わたし、福岡に行くことにしたの」

「何を言っているんだ」

「お父様が、福岡支社の支社長秘書室に空きが出来たって仰っているの。わたしに行かないかって。福岡支社は今度のMIプロジェクトの一角を担う支社だって仰っていたわ。それ以外には今すぐ、人を採用する計画は無いんだって。あなたと一緒に仕事ができる可能性は、今のところそれしか無さそうなのよ」

「そんなの駄目だ！福岡に行ってしまったら、そう簡単には会えないじゃないか」

「でも、きっと道はあるはずよ。わたしも寂しいけど、毎日電話するわ」

「そんなこと、自分ひとりで決めるなよ！お前がいなくなったら・・・」

「大丈夫よ、あなたには愛子さんがいるでしょ。大切にしてくださいよ。でも・・・・亜希子さんや、由美さんは駄目よ。永遠の伴侶はあなたしかいないんだから。あなたがわたくしを攫^{さら}って行ってくれないから・・・」

「どうしても行くのか？」

「来週の月曜日に発つわ」

「そんなに急に、どうすればいいんだ。いくら時間と空間が自分の意思でどうにでもなるって言ったって、この次元じゃあそんなに自由に行き来はできない。あと2日しか無いじゃないか」

「日曜日、あなたとふたり切りで過ごさせて。一日中、他の誰とも連絡を絶って、ね、いいでしょ」

「分かった。約束するよ。朝、9時にさっきの改札口で会おう」

「それまでは、わたし、あなたに連絡しないわ。我慢する。その時にわたしの総てをあなたに預けるわ」

ふたりは八重洲の改札口で5分間ほどじっと佇んでいた。祐子は賢の手をしっかりと握り締めて放さなかった。目を潤ませていた。手に伝わってくる震えでこみ上げる涙を堪えている祐子の様子が賢にははっきり分かった。それに同調するかのように賢の体も震えた。涙が溢れ出るのをやっとの思いで堪えた。賢は祐子を抱き締めたかった。しかし、そうしたら離れられなくなることをふたりは知っていた。福岡なら行き来するのは不可能ではないはずだ。何故これほどまでに悲しみが込み上げてくるのか不思議だった。賢がマンションに戻ったのは9時過ぎだった。愛子の姿が無い。賢は不安になった。急いで辺りを見回し、寝室に入ってほっとした。愛子は着の身着のまま寝入っていた。夕食の支度もしていなかった。賢は冷蔵庫から冷凍ピザを出し、オーブンで暖め、8つに切って二つの皿に載せてから、ベッドに戻って愛子の肩をそっと揺すった。愛子はゆっくり眼を開けた。賢の姿を見るといきなりしがみ付いた。

「パパ、怖いわ。誰かが追いかけて来たの。ドアをノックしたの」

「一体誰だろう。愛子、これからは非常ベルを身に着けていなさい。この前買ったのがあるだろう。危ないと思ったら非常ベルを押すんだ」

「うん、そうする」

ふたりは遅い夕食を摂った。愛子はピザを美味しそうに頬張った。食事の後、賢と愛子は続けて風呂に入った。賢は愛子が入浴している間、浴室の入口に立って愛子の出てくるまで待機してやった。この日、愛子は一刻も賢の近くを離れることができなかった。それは不思議な感覚だった。自分が一人で留守居している時は、気を紛らわせることをして何とか我慢できるのだが、一旦賢が帰宅すると、もう賢から離れることができなくなっていた。少しでも離れると、恐怖と悲壮感の入り交じった感情の渦に巻き込まれてしまった。湯から上がると、ふたりは床に入った。愛子は頭がカーツとして、ただ静かに賢の胸に顔を埋めているだけだった。賢は一日の出来事を省みた。どうしても心にはっきり描けない出来事があった。それは祐子と別れる時の自分の意識の動きだった。あの胸を締め付けられるような悲しみに似た感情が一体何だったのか、いくら意識を集中してみても、思考をめぐらせてみても、客観的に自分の感情

や意識の動きを省みることは難しかった。意識をその一点に留めたまま、直ぐに眠りに落ちた。愛子はなかなか寝付かなかった。しかし、賢の胸に抱かれているので、安心して心地よかった。

翌日、賢は昨日の祐子の悲しそうな姿が心に引っ掛かって、居ても立ってもいられなかった。愛子と共に朝食を済ますと、直ぐに祐子に電話を掛けた。

「あなた、あなた、ね。ごめんなさい。わたし、今日、福岡の支社長さんと打ち合わせをしなくてはならなくなったの。あなた、ごめんなさい。わたし、断れないの。お父様がどうしても今日支社長さんと会って、今後の計画をしっかりと立てるようになって。わたしの為にわざわざ福岡から支社長さんと呼びつけたとおっしゃっているの。支社長さんとの打ち合わせが終わったら必ず電話するわ」

「祐子、何時でもいいから必ず電話しろよ。迎えに行くから」

「あなた、ごめんなさい。わたし、何時になるか分らないわ。待っていてね、打ち合わせが終わったら直ぐに電話するから」

祐子の声には悲しみと、焦燥感が感じられた。賢は亜希子のスマホに電話した。電話に出られないと応答があった。賢は直ぐにメールを送った。しかし、亜希子は生け花の発表会の為に朝早く家を出ていた。祐子のことは分らないと返事が来た。賢は思い切って藤代家に電話した。登紀子が出た。

「おはようございます。内観さん、祐子のごめんなさい、急な話になってしまって。主人の話では、祐子がどうしても今度のプロジェクトに参加させて欲しいと言うので、本当はルール違反なんだけど、九州支社の支社長が秘書を募集していたので、無理を言って採用してもらったとのことなのよ。九州支社長は今度のプロジェクトの監視グループのメンバーなんですか？そのポストしか空席は無いようなのよ」

「ステアリング・グループですね。それで、祐子さんは何時発たれるのでしょうか？」

「それが、急なお話なの。明日の朝発って、午後3時からのお得意様との会合に支社長に同行することになるらしいの。どうしても形を作らな

いとまずいお得意様のようなのよ。本当は、支社長は先週中に新しい秘書を雇う予定で、もう面接も終えて最終決定段階だったそうなのよ。それを主人が無理やり祐子を採用するように押し付けたらしいの。だから、内観さんには本当に申し訳なかったのですが、祐子の緊急の対応は許してあげて頂きたいの。今日は九州支社長と打ち合わせをしてから、転勤の準備をしなければならないでしょう。とっても忙しいのよ。勿論、荷物は後で発送するつもりだけど、少なくとも出張の支度はしなければならないでしょう」

電話を切ると賢は、祐子のことか心配になってきた。祐子が急坂を下降するトロッコに乗ってしまったような感覚を覚えた。どうしても止められないのだろうか？自分が飛び乗ることはできそうにない。福岡などは日帰りのできる場所なのに、何故か、祐子が遥か彼方に去ってしまう様な、腹の底から込み上げてくる悲しさに襲われた。

その日、賢は愛子と共に過ごした。原を誘っていつものファミリーレストランで昼食を共にした。その間も、常に祐子からの電話を待っていたが、午前中は電話もメールも、何の連絡も無かった。原が愛子に向かってトラウマの話をした。

「虎と馬なら、やっつけるのはそんなに難しくありませんよ。はっはっはっ」

原は愛子が毎晩、突然襲ってくる恐怖に耐えられずにいることを知らなかった。愛子が、殺人者を連想させるようなモノに出会ったときに、恐怖を抱いているのだと考えていた。

「原さん、愛子のトラウマはもっと深刻ですよ。夜一人では眠れないんです。何時も僕が付いていてやらなくてはならないんです」

「わたしにも、何故だか分からないの。暗くなると途端に、恐ろしい場面が目の前に現われるの。とてもリアルなの。わたし、恐ろしくて死んでしまうんじゃないかと思うほどなの」

原は済まなそうに口を少し開いて苦笑いをした。

「愛子さん、ごめんなさい。そんなに深刻だとは思わなかった。それじゃあ毎晩苦しいでしょうね・・・僕の方法を試してみませんか？上手

くいけば儲けものでしょう」

「う、うん。何かいい方法があるの？あの、くるくる回るダンスなんかじゃ、あの怖さは消えないと思うけど……」

「違いますよ。思考の体験で心の奥に薰充した記憶を消すんです。ほら、よく退行催眠という方法があるでしょう。確か、内観さんはそれができると聞いてきましたけど。それに似た手法なんです。実際には僕より、内観さんにやってもらったほうがいいかもしれないけど。僕は演技が旨くないんで……」

祐子のことで頭が一杯になっていた賢は原の言葉で意識を愛子のトラウマに向けた。

「僕も一度は愛子に退行催眠を掛けようかと思っていただけ、愛子には済まないけど、僕の意識があの場合に戻ることを拒否しているんで、原さんの方法が僕にできるかどうか自信が無いな」

「そんな深刻なことをやるわけじゃありませんよ……でも、おふたりとも麻子さんが亡くなった時の状況に戻ることが難しそうなので、僕がトライしてみますよ」

そう言うと、原は愛子の方を見て2度頷いて見せた。3人は一旦賢のマンションに戻ることにした。部屋に入ると、原は愛子を一人掛けのソファに座らせ、自分は3人掛けのソファに愛子に近付いて座った。賢は原の横に少し離れて座った。

「では始めます。愛子さん、ちょっと辛いかもしれませんが、我慢してください」

愛子は黙って頷いた。

「愛子さん、先ず目を瞑って、あの事件が起きた時の状況を思い出してください。気をしっかり持って、冷静に思い出してください。決してその場面から目を逸らさないうで、感情の高ぶりを感じても、気にしないで自分を見つめるようにしてください。今貴女が麻子さんとふたりで部屋に居ます。その時、突然入り口の扉が開いて誰かが入って来ました。そこにはハンマーを手にした男性が立っています。愛子さん、その男性をよく見てください。そう、酔っ払っているようです。よく観てください。

彼の顔つき、顔色、目をよく観てください。それから、彼の身体全体をよく観てください。どんな姿だったか思い出してください。そう、それは前のお父さんです。あなたは天井の辺りから、前のお父さんの姿を観ています。お父さんが手にしているハンマーの形もしっかりと確認してください。そしてこの姿をよく覚えておいてください。はい、ここで意識を一度現在に戻します。いいですか？ぼくが1、2、3と言いますから意識を戻してください。1、2、3 はい・・・一旦目を開けてください。今、あなたの頭の中にあの事件を起こした、前のお父さんの姿が焼き付きました。さて、これから貴女が前のお父さんと間違えた人たちの姿を順番に思い起こしてください。最初はカメラマンでした。よく観てください。カメラマンの持っているのは、そう、大きな長いマイクです。よく観てください。顔ははっきりは見えなかったでしょうが、そう、お父さんとはまったく別人です。服装も、そう、まったく違う服装です・・・」

原は、愛子が恐怖を感じた男の姿を1場面ずつ愛子に思い出させていった。それから、あの殺人現場の光景に戻り、そこで起きたことを逐一正確に思い出させた。愛子は心を乱すことは無かった。そして、最後に原は言った。

「愛子さん、あの事件はもう過去のことです。過去は存在しません。あなたの頭の中にあつたあの事件はもう存在していません。あなたの頭に残っていた過去の記憶を消し去ってください。もう、貴女には必要の無いものです。いいですか、僕が1、2、3と数えたら、もうあの嫌な記憶はなくなります。1、2、3 はい・・・ではゆっくり目を開けてください」

愛子が目を開けると、念を押すように原が言った。

「愛子さん、もう怖いものはありませんよ。あの嫌な記憶はあなたの頭から消え去りました。いいですね。今夜からは、何も怖いものはありません」

「原さん、ありがとう。でもね、わたし誰かに追跡^{つけ}られているの。帰りに何時も誰かがわたくしの後を追跡て来て、部屋に入ると、ドアをノック

クするのよ。わたし怖くて……」

原はちっとも慌てた様子を見せず、賢の方を観て言った。

「内観さん、最近帰りが遅いでしょう。僕がこちらに伺って、愛子さんと一緒に居てあげたいと思いますが、いいですかね？」

「それは願っても無いことです。愛子良かったじゃないか。原さんが居ればもう大丈夫だ。何も心配要らない」

愛子は幾分不安げに、唇をきつと結んで頷いた。原は月曜日から毎夕、賢のマンションを訪れることになった。

祐子は新宿にある帝王キングホテルの3階の会議室で九州支社の鷺沼支社長と会うことになっていた。祐子は7時半に青山の家を出た。悲しみと不安とが入り混じった、やりきれない気持ちを抱えたまま、新宿西口のプロムナードを歩いた。行き交う人は皆、まるで祐子の気持ちを写したかのように暗い顔をして歩いている。ホテルに着いたのは7時50分を回った頃だった。祐子がホテルのクォークにコートを預け、ボーイに案内されて部屋に入ると、既に九州支社長の鷺沼とその部下香川が楕円形のテーブルの奥の方の席に座っていた。鷺沼はタバコを燻らせている。祐子が頭を下げると、鷺沼は右手でくわえていたタバコを持って灰皿に押し付け火をもみ消し、その右掌を上に向けて差し出し、自分の隣の席を示しながら言った。

「朝早くから、ご苦労様です。さあ、どうぞ」

祐子は「失礼します」と言って、鷺沼の示した席の隣の席に少し距離を置いて腰掛けた。

「始めまして、わたくしが九州支社の支社長を仰せつかっております鷺沼です。そして、こちらは今度のiプロジェクトの九州地区の責任者になってもらっている香川君です」

祐子は丁寧に頭を下げた。

「始めまして、わたしは藤代祐子と申します。この度はご採用頂きまして、ありがとうございます」

部屋の中は、タバコの煙が充満している。祐子にはタバコの煙の中での

打ち合わせは初めての経験だった。以前いた会社では会議室は総て禁煙になっていたし、何時も一緒にいる賢もタバコは吸わない。

「いや、社長のお嬢様がこれほどの美人だとは存じませんでした。それにしても、よく社長が可愛い一人娘を手放されましたね。社長に、よほどわがままをおっしゃったんじゃないですか？」

「いいえ、わたくしは一人娘ではありません。妹がおります」

「あっ、いや、失礼しました。わたくしはてっきりお嬢様はお一人と思っておりましたもので、申し訳ありません」

「いいえ、わたくしは養女です。昨年までは父の娘は妹だけでしたから、誤解されても仕方ないと思います」

「そうでしたか。それにしても存じませず失礼致しました」

「いいえ、とんでもございません」

「それでは、早速、藤代さん……ちょっと呼びにくいですね。どうも社長のイメージが浮かんできてしまいますから……そう、祐子さんと呼んでもよろしいでしょうか？」

「はい、かまいません」

「では、祐子さん、既に社長からお話を伺っていることと思いますが、貴女には、九州支社長付秘書兼iプロジェクトの東京本部との連絡係りとして働いて頂きたいと思っておりますがよろしいでしょうか？」

「はい、わたくしは父からはiプロジェクト関連の秘書の仕事としか伺っておりません。細かいことは何も存じませんので、よろしく願いいたします」

「そうですか。その方がわたくしどもも説明し易いです。なあ、香川」

「はい、支社長」

部下の香川は、男性としては背の低い、一見頼りなさそうな感じのする男である。

「この香川君はちょっと見は頼り無さそうに見えるけど、どうしてなかなかの切れ者で行動的な奴でしてね、今日こうして連れて来たのも、今直面している問題、うん、これはこれから話しますが、僕は、香川をその問題をクリアすることのできる人物と見込んでいるんです。彼は5

ヶ国語、日本語を入れると6ヶ国語を話せるんです。英語、スペイン語、フランス語、イタリア語それに中国語だったな。彼は結構度胸が据わっていて、強面の用心棒のような相手に対しても、平常心で対応できるんですよ・・・で、本題に戻りますけど、実は秘書の席はここ2ヶ月ほどの間ずっと空席だったんです。それが、佐世保に本社のある今度の取引先の要求で、秘書が不可欠になってしまったんです。追々分かってくるとはと思いますが、この取引先は貿易関係の会社で建築関連の資材をアフリカや南アメリカなんかから輸入して売り捌いている会社なんです。結構際どい取引をしているようなんですが、当社のような堅実な会社が何故こういう会社と取引するかというと、今業界で入手困難になっている原材料を扱っていて、それもかなり融通の利く取引ができる会社だからなんです。九州支社のミッションは、表向きは半導体の製造、建築機械の製造、それに通信機器の製造ということになっていますが、社長から伺っているかもしれませんが、それにレアメタルの入手、工業用ダイヤモンドなど宝石類の入手、外国為替取引なども受け持っているんです。今度の取引先はその内のレアメタルと宝石類の入手先として、現在までほぼ対等の立場で交渉を進めてきているんですが、何しろ相手は貿易に関しては裏の裏まで知り抜いている会社ですから、取引には慎重を期していて、わたくしが単独で交渉の場面に出なくてはならないことがかなりあるのです。そう、相手は社長ですけどね。その取引の場面で約束することが幾つかあるのですが、相手も常に警戒心を抱いていますから、香川のような男を同行させたいのですが、相手が認めないのです。今まではわたくし一人でこなして来ましたが、取引条件やら、契約内容やらで複雑な内容を扱うことが多くて、相手の戦術に落ちてはいけないので秘書の同行を申し入れたのです。最初相手は拒否しましたが、お互い女性の秘書一人ずつなら付けてもいいということになったのです。まあ、取引の場でやることは、相手に対するけん制、これはただ出席しているだけで済みます。それと、相手の話したことを記憶したり、記録したりすることです。これがなかなか難しいんです。会話の中で行間を読むようなこともしなければなりませんしね。まあ、詳しいことはこの後午後

にでも話します」

祐子はこの、午後という言葉に、絶望的な感覚を抱いた。もう、賢と会えないかもしれないと思った。知らずに目に涙が浮かんだ。鷺沼はそれを見逃さなかった。

「おや、祐子さん、どうかされましたか？ちょっと厳しい話だったのでしょうか？」

祐子は首を横に振ってから言った。幸い涙は零れずに目頭に留まった。

「いえ、ちょっと、今日の内にしておかなければならないことがありまして、ちょっと大切なことだったので……」

「そうですか。それはそうでしょうね、あまりにも急な話ですから。分りました。午前中という訳には行きませんが、何とか3時までには終わりにしたいと思います。それで間に合いますか？」

本当は、午前中にして欲しかったが、それでも夕方まで少し時間が取れそうなので祐子はほっとした。

「え、ええ。それで、何とかします」

祐子はハンドバッグを手にするると、そこからハンカチを取り出した。それはポーズで、本当はスマホに着信が無いかを知りたかった。しかし、スマホが無かった。祐子は自分が朝、賢とスマホで話して、それを化粧台の上に置いたままにしてきたことを思い出した。頭がカーッと熱くなった。あとはトイレに立った時か昼食のときに、ホテルの電話を使って連絡するしか無いと思った。まあ、何とかなるだろうと思った。祐子は何気ない様子を装って、ハンカチを口元に当ててから、そっと右目の目じりを押さえ、ハンドバッグに戻した。

「だけど、お嬢様がこういう難しい仕事に就かれるのを、社長がよく許されましたね」

「わたくしが無理に頼んだのです。今のところ、採用の計画は九州支社を除いて無いと申ししておりました」

「そうですか？わたくしも他の支社や支店の計画は詳しく知りませんが、もっと東京の近くの支社にも採用計画があるような気がするんですがね……」

「もう決めて頂いたことですから、わたくし、頑張ります。もうひとつの仕事、iプロジェクトの方はどういうことを担当するのでしょうか？」

「iプロジェクトは香川君の方が詳しいかもしれませんが、僕がおおよそのことを説明して、その後で香川君に説明させます。iプロジェクトについてはどの程度ご存知ですか？」

「はい、父から国家の機密事項に相当する、戦略的プロジェクトの一角を担う大プロジェクトだと聞いています。インフラプロジェクトというんですね。人々の心を物質偏重から精神性重視の考えにシフトさせることが目的だと聞いていますが……」

祐子は賢がそのリーダーになるということを知っていることを覚られないように気を付けて話した。

「そう、そうなんです。まったく持って、よく理解できないプロジェクトなんです。ましてそのインフラときちやあ、一体何を造ればいいのか、皆目見当も付かないですね。せいぜいわれわれの予想できるのは、あのVEAS館の機能拡張版程度のイメージなんです。まあ、祐子さんがそこまでご存知なら、もうわたくしから説明することも無いでしょう。祐子さんにはこの九州支社と東京の本部とのリエゾン（連絡役）を勤めて頂きたいのです。秘書の仕事と両立させるのはきついかもかもしれませんが、祐子さんがそのようにお望みだとのことで、大変心苦しいのですが両方お願いすることにしたのです」

香川がやっと口を開いた。

「今までに無いものの考え方のできる人間でないと、このプロジェクトを成功させることは難しいでしょうね。これだけ物質偏重な世界になっている訳ですから。このプロジェクトのリーダーに指名された内観という男ですが、僕は何となく胡散臭い感じがするんですよ。失踪経験があるとか、失踪者を帰還させたとか云われているでしょう。そういう非現実的なことを引っ下げて、臆面も無く当社のような巨大企業に乗り込んでくる訳ですから、意図が何も無いはずはないと思うんです。何でも、初めての顔合わせでも落ち着き払っていて、出席したメンバーはあっけ

に取られたようですよ。だけど、彼等はカリスマ性は感じなかったって言っていました。暫くは様子を伺おうと思っています。彼の策定している予算額だって半端じゃないですよ。失敗したら会社が可笑しくなるような額でしょう」

祐子は賢のことを快く思っていない香川という男を、逆に胡散臭い男だと思った。

「香川、まあ、そうむきになるな。お前はiプロジェクトの片腕とも言える九州支社の責任者なんだぞ。どう進めたらいいのか答申しなくてはならないだろう・・・祐子さん、そうなんです。社長名で提案があれば出すようにと通達が来ているんです」

鷲沼は祐子の方を向いて確認をとるようにしてから続けた。

「九州は中国や韓国に近いから海外への展開で、一番期待されているんだぞ。だからインフラの候補地だって、社長は先ず東京と九州から始めるべきだと考えているようだ。それで大切なお嬢様をこんな僻地に送ってよこされたんだ。それだけ重要視されている支社だということだ。香川、今回のリーダーだって、社長の特命で抜擢されているんだぞ。あまり否定的なことを言ったらまずいぞ」

「はい、分かっております。でも、お嬢様がお見えなんで、噂なんかも少しはお耳に入れておいて頂いた方がいいと思いましたので」

「どんな噂なのでしょう？」

祐子は賢のことを快く思っていない香川の言葉は、決して気持ちの良いものではなかったが、悪い噂なら是非賢の耳に入れておきたいと思った。

「支社長、お嬢様の前で、あの噂の話をしてもいいですかね？」

「まあ、いいだろう。いずれは祐子さんも、知ることになるだろうから。だけど、あくまで客観的な視点で話せよ」

「はい、支社長・・・お嬢様、実はiプロジェクトのリーダーには何人も女がいるようなんです。それも、みんな失踪に絡んだ人たちのようで、彼はその人たちを助けては、自分のものにしてしまっているようなんです。もっと酷い噂は、最終的に彼はこの会社を乗っ取ろうとしてい

て、社長令嬢—これはお嬢様のことなのか、妹さんのことなのか分かりませんが、社長のお嬢様に接近しようとしているらしいのです。お嬢様、そんな話は聞いたことありませんか？」

「そのお嬢様と言うのは止めてください。祐子と呼んでください。わたくしにはそんな心当たりはありませんが・・・それに、父からはこのプロジェクトのリーダーがそんな方だなどというお話はひとつも伺っておりませんが・・・誰に対しても優しい心を持った立派な方だと・・・」

祐子はかなり気分を害した。しかし、そのことを覚られてはまずいと思った。一体どこからそんな噂が流れたのだろうと思った。こんな離れた九州にまで、賢が失踪に関係しているという噂が流れているのだ。祐子は一連の失踪事件に対する人々の反応が、決して無視できるような漠然としたものでは無いのだと思った。

3人は話し込んでしまい、1時を回っているのに気付かなかった。漸く鷺沼が気付いた。祐子は二人の男性とホテルのレストランで昼食を共にすることになった。既に1時15分になっていた。レストランのあるグランドフロアに降りる時、祐子はトイレを理由に少し遅れてレストランに行くと言った。祐子はふたりから遅れてエレベータに乗り、グランドフロアで降りると、直ぐにホテル内のテレホンブースに入り、賢に電話を掛けた。呼び出し音が鳴っていたが賢は出なかった。祐子はメッセージを残すことにした。

「あなた、わたしよ、祐子。3時には終わるわ。新宿のこの間行った大通りを下った角のレストラン、名前忘れたけど、そこで待っていて。一緒に夕食を食べよう。今日のごめんね。あなた、愛してる」

最後の「あなた、愛してる」は囁くような小さな声で言った。それから亮子にも電話をかけたがやはり出ない。仕方なく明日から福岡に行くというメッセージを残した。メッセージを送り終えてから祐子はレストランに向かった。

賢は気が気でなかった。祐子から連絡が入らない。本来感服するはずの原のトラウマの処方にも、両手を上げて喜べなかつた。愛子のトラウマ

がなくなるかもしれないという期待は大きかったが、祐子の心配がその喜びの感情を押し退けて、賢の心を捉えていた。愛子と原はダンスの話に夢中になっている。賢はじっとしてられず、ふたりを置いて隅田川のほとりに出てみることにした。意識が定まらない内に賢は堤防の淵に立っていた。祐子と初めて逢った場所だ。祐子を見た時の衝撃が蘇って来た。賢はその時祐子に何か話し掛けたのだが、その言葉を思い出せなかった。唯、自分が差し出した右手に祐子が恥ずかしそうに応じたことははっきり覚えている。確か祐子は光の塊のように見えた。一瞬でこの女性が自分の一生の伴侶だと覚^{きと}ったことは覚えている。いつしか頬を涙が伝わって流れた。なぜか分らなかった。祐子はまだ東京に居るし、福岡なら、いつでも会いたい時に会える。朝会いたいと思ったら昼には会えるはずだ。なのに、我慢できないほど悲しかった。賢は祐子にもう一度メールを入れようと思った。ポケットに手を入れて初めてスマホをマンションに置き忘れてきたことに気付いた。賢は急いでマンションに戻った。部屋に入ると、原がスーフィーのダンスを踊っていた。賢はその場の空気を乱さないように注意して、ジャケットを脱ぎながらさっき座っていたソファーに近付いた。愛子が賢に気付いて言った。

「賢パパ、電話が鳴っていたわ」

その声で、原はダンスを止めた。ソファーの上でスマホが点滅している。賢は胸躍った。祐子からのメッセージを聞くと、賢は再びジャケットを着た。

「原さん、僕はちょっと出掛けてきますから、愛子のことよろしく願います。少し遅くなるかもしれませんが、ふたりで夕食を済ませておいて頂けますか？」

「愛子、いいね、原さんの言うことをよく聞くんだよ」

「いやね、パパ、わたくしもう大人よ。そんなに子ども扱いしないで。分ったわ。気を付けて行ってらっしゃい」

「後は僕に任せてください」

賢は電話を手にするると直ぐに部屋を飛び出した。エレベータに乗る前に、忘れ物が無いか確認した。こんなに慌てるのは子供の頃以来だと思

い自分の行動に苦笑した。

賢が新宿のレストランに着いたのは2時10分頃だった。連れが来ると言って、奥の4人掛けのテーブルに着かせて貰った。コーヒーしか頼まないで、ウエイトレスは不機嫌そうに厨房に入って行った。賢は一杯のコーヒーを前に瞑想をした。総ての雑念を消そうとしたが、祐子の姿が現前し、心を空しくすることができない。意識を祐子に向けてみたが、何のメッセージも伝わって来ない。それでも賢は瞑想を続けた。何か肩に触れて意識を現実に戻した。

「お客さん、どうかされましたか？ご気分でも悪いのでは？」

ウエイターが賢の肩を軽く叩いて言った。

「あっ、すみません。少し瞑想していたもので、そう、マルゲリータピザをいただけますか？」

「はい、お一つですね」

「ええ」

賢が壁に掛けてある時計を見ると3時40分になっていた。携帯を覗いても何の連絡も入っていない。賢はもう一度祐子にメールを送った。やがてピザが運ばれてきたが、賢は出来るだけ時間を掛けて、少しずつ口に入れた。それでも30分掛けてピザ1枚を食べるのは苦痛だった。4時を回っても祐子からは何の連絡も無かった。賢は辛味チキンフライを頼んだ。メニューにはバッファローウイングと銘打ってある。ふとアリゾナのパブを思い出したが、心は躍るところか却って悲しみが込み上げてきた。5時を過ぎても祐子からの連絡は無かった。賢は6時半まで何とか野菜サラダと、ソーセージを頼んで持ち堪えたが、きっと祐子に事情ができたのだと思い一旦アパートに戻ることにした。賢は全部で6通のメールを送った。電話も5回掛けた。賢がアパートに戻ったのは7時過ぎだった。賢は亜希子に電話を掛けた。亜希子は家に戻っていた。祐子はまだ帰宅してないと言った。亜希子も祐子のことを心配していた。登記子に聞いて来ると言って電話を切った。暫くして、亜希子から電話が掛かってきた。

「可笑しいわ。祐子お姉さま、ホテルを出ているようなの。ホテルの会

議室の担当の人の話では6時半頃出たんだって。可笑しいわ、あなた、どうしたらいいかしら」

「亜希子、祐子が戻ったら、直ぐに電話をくれないか？」

「わかりました。あなた、どうなさるの？」

「俺は、もう一度あのレストランに行ってみる」

賢は原に再び愛子のことを頼んで、直ぐにマンションを飛び出した。レストランのウエイトレスとウエイターに尋ねたが、祐子の来た形跡は無かった。レストランを出て新宿駅に戻る途中で、亜希子から電話があった。亜希子は藤代家でも大騒ぎとなって、皆で祐子の部屋に入ってみたが、何も祐子の足跡に繋がる物は無かったと言った。賢は亜希子に頼んで、帝王キングホテルに電話を入れてもらうことにした。鷲沼支社長は先ず遅くなった詫びを言ってから、祐子を6時半に帰したと言っていると、亜希子が心配そうに賢に説明した。賢は「しまった、もう少し待つべきだった」と思った。しかし、ウエイターやウエイトレスを責める気持ちは起きなかった。仕方なく賢はまたマンションに戻った。既に10時を回っている。賢は原に礼を言った。原は楽しかったと言って帰って行った。愛子も楽しかったと言った。原さんは色々なことをよく知っていてとても勉強になるとも言った。賢は愛子に先に入浴するように言った。愛子は何時ものような不安な様子を見せず一人で入浴した。そして出て来ると、麻子の骨壺の前で瞑目してから、「賢パパ、お先に。おやすみなさい」と言って一人でベッドに向かった。この日はベッドに入っても賢を呼ぶことは無かった。原の癒しが功を奏したことは明らかだった。賢は嬉しかった。しかし、祐子のことが心配で居ても立っても居られない。賢はソファーに腰掛けて、守護霊と指導霊に対し救済の祈りをした。祐子と高尾山に登ったとき、祐子を救って欲しいと祈って以来、救済を祈ったことは無かった。これまでの人生でたった2度の救済を求める祈りは、いずれも祐子を救いたい一心からの祈りだった。30分ほど祈り続けた。やがて電話の音で瞑想状態から覚めた。既に12時近い。亜希子からだった。祐子が帰って来たと言った。しかし、放心したような状態で何を聞いても空ろな状態だと言う。賢に電話を掛けるか、メー

ルをするように言ってみたが、首を横に振るだけだと言った。スマホも何処かに無くしてしまった様だと言った。賢は祐子が泣いているかどうか聞いた。亜希子は、祐子はただ放心状態で泣いてはいないと言っている。賢は一先ず祐子の無事が確認されたことで、胸を撫で下ろした。愛子はひとりで眠りに落ちていた。このマンションに越して来て、初めてのことだった。原の言葉が只の言葉での表現だけでなく、現実根ざしていることを目の当たりにしたことで、賢は原の能力の大きさに驚きを感じた。原智明語録に「この世で自分に起きてくることは、自分が呼び寄せていることだ。偶然に起きることは無い。肯定的あるいは否定的意識であることに執着すると、それがあるタイミングで顕現する」というのがある。賢はこれまで愛子のトラウマは愛子自身がその引き金を引いているという見方をしたことは無かった。原は明らかに、そういう視点で愛子の心の中に張り付いた概念を取り除いたのだと思った。

祐子は無事に戻った。原因が何であろうと、早く祐子に正常な状態に戻って欲しかった。賢はソファに腰を下ろすと、必死に祐子の回復を祈った。暫く意識を集中していたが、そのままソファの上で寝込んでしまい、気付いたときは朝になっていた。既に7時を過ぎていた。スマホの受信ランプが点滅している。賢は直ぐにメッセージを聞いた。

「あなた、九州に出掛けます。昨日はごめんなさい。わたしも、何が何だか分からないの。気が付いたら夜が明けていたわ。5時だったの。急いで出張の支度をして家を出たの。今、空港から電話しているの。スマホも無くなってしまったわ。確か、家に忘れたと思ったんだけど。ごめんなさい。九州に着いたら連絡するわ。本当にごめんなさい。あなた、愛しているわ」

賢の頬を涙が伝わって流れた。しかし、祐子は無事だった。元気は無いものの、意識も正常に戻っている。賢は守護霊、指導霊に感謝の祈りを捧げた。それにしても一体何があったというのだろうかと思った。いくら意識を祐子に向けて集中しても、祐子には繋がらなかった。月曜日の朝である。愛子が朝食の支度を済ませていた。愛子はいつもの明るさで賢に挨拶した。

「賢パパ、おはよう。そこに寝てしまったの？祐子さん、帰ってきたのかしら？・・・わたし、昨日は一人で眠れたわ。何も怖くなかった。きっと原さんのおかげよ」

「きっとそうだ。彼はすごい能力を持っているな。本当に素晴らしい人だ。愛子、彼と何時でも話ができることに感謝しなくちゃあな」

「うん、わたしもそう思うわ。でも、賢パパには及ばないかも・・・」

福岡

祐子は6：40分発の福岡行きの便に乗っていた。鷺沼支店長たちと同じ便だった。昨日の打ち合わせで、空港から直接福岡支社に向かい、そこで午後に予定している取引先との打ち合わせの下準備をすることになっていた。およそ2時間後に福岡空港に着いた。祐子は紺のスーツに、ベージュのトレンチコートを身に着けている。ビジネスレディに相応しい姿だった。3人は空港のレストランで簡単に朝食を済ますと、迎えに来ていた社用車で福岡の市街地にある支社に向かった。それまであまり口をきかなかった鷺沼が、車の中で祐子に話し掛けた。

「祐子さん、昨日は夜まで付き合わせてしまって、申し訳ありませんでした。何しろ慎重に扱わなければならない取引ですので。今日もいきなり仕事で、さぞ人使いが荒い男だと思っておいででしょうが、今は特別と思ってください。普段はこんなにハードなスケジュールになることはないんですが・・・」

「いいえ、わたくしは今日から東領製作所の社員なんですから、ご遠慮なさらずに何なりと仕事を言い付けて下さい」

「いや、そうおっしゃって頂けて安心しました。昨夜は社長の奥様や、妹さんの亜希子様から何度も電話がありました。祐子さんがお戻りにならないと・・・わたくしも東京は不案内ですから、どうすることも出来なくて・・・」

祐子は、鷺沼や香川は朝会ったときには「おはようございます。昨日はご苦労様でした」としか言わなかったのに、何故、今頃になって弁解がましいことを言い出すのだろうと思った。

「わたくしはホテルの会議室を出てから暫くして、急に気分が悪くなってきたのです。一寸寒気がして、意識が定まらず吐き気もして、もしかしたらインフルエンザにでも感染したのかと思いました。新宿の喫茶店に入って暫く休んでいたのですが、気が付いたら11時過ぎになってしまっていました。直ぐにタクシーで家に帰って、そのまま休みました」

「それは大変でしたね。何か食べたものが悪かったのでしょうかね？でも、我々は特に異常無かった訳ですから変ですね。なあ、香川」

「ええ、何か可笑しいですね。ホテルを出られるまで、お嬢様、いえ、祐子さんは、元気でいらっしやっただでしょう」

「ええ、でも、朝になったら、正常な状態に戻っていました。勿論風邪薬を飲んで寝たことは寝たんですが」

支社は12階建ての白壁のビルだった。祐子は支社長の後に附いてエントランスの扉を潜った。中に入ると、センターに受付のカウンターがありふたりの受付嬢が深々と頭を下げた。

「お帰りなさいませ」

3人はエントランスの左奥にあるエレベータに乗った。支社長室は最上階にあり、その隣の部屋が応接室になっていた。支社長は香川と祐子に応接室で待つように言った。ふたりが応接室の椅子に腰掛けると間もなく、ライトグレーの制服を着た女性が日本茶を3つ持って来た。祐子は女性が出て行った後、直ぐに茶を口にした。なぜか口の中が苦く感じていて、時々胃から果物の腐敗したようなゲップが出る。口の苦味を流し込みたかった。茶を一口飲み込むと胃にズキッとする痛みが走った。祐子は「昨日きつと何か変なものを食べたに違いない」と思った。

「やあ、待たせて悪かったな。留守の間にいろいろ溜まっていたからな。さて、今日のハイパートレード社だけど、やはりわたし一人か、あるいは女性の秘書なら、あと一人連れて来てもいいと言ってきているんだ。それで、疲れているところを申し訳ないんだけど、祐子さん同席してくれますか？大体1時間もあれば終わると思うんだけど。それが済んだら祐子さんは今日はホテルに引き上げてもいいです。ホテルは、香川、どこだったかな？」

「はい、支社長、J R福岡駅前のクノッソホテルです。1週間の予約を入れてあります」

昨日祐子は、暫くの間ホテルに住んで、その間に最短で3日後に借り上げ社宅に移ることになると言われていた。

「祐子さん、多分3日位で借り上げ社宅の用意が出来ると思いますから、そうしたらもっと広い場所にお移り頂けますので、それまで暫くの間辛抱して頂けますか？・・・で、話を元に戻して、昨日は詳しい話はしなかったけど、ハイパートレードという会社は表向きは貿易会社ということになっているけど、陰ではかなり悪辣な商売をしているという噂もあるんだ。今回の取引は当社のコンピュータ製造部門で必要なタンタル、インジウム、リチウム、チタンそれに白金の交渉だ。あの会社の商品の入手ルートがどうしても掴めないんで、不安は残るんだが、当社も中国からの入手が難しくなっていて、多少危険を冒してもなんとか手に入れなくてはならないから、止むを得ない取引ということになる。本当は本社の資材部長にも出席して欲しいんだが、彼は今、次期コンピュータの心臓になる3D・CPUの交渉にアメリカに飛んでいる。こちらの調達とフェーズを合わせなくてはならないんだ。際どい橋を渡るんだが、失敗は許されない。祐子さんにいきなり、こんな重責を担わせることになってしまって本当に申し訳ないんだが、今日は座わっていてくれるだけでいいので交渉に出席して欲しいんだ」

鷲沼は上長としての姿勢で話した。

「はい、分かりました。同席させていただきます」

「分かっていると思うけど、会釈や相槌はわたしに合わせて欲しい。そして、相手が失礼なことを言ったりしても、決して怒りを面に出さないこと。わたしが怒りを露にしても、それに同調しないで欲しい。むしろ、熟考するような振りをして欲しい。決して自分の感情で対応しないことだ。時々話を逸らせて来るだろうが、それに乗らないことだ。あくまで交渉の場だということを忘れないように。いろいろ注文を付けて済まないが、まだ、君の資質をよく分かっていないから、基本的なことだけは伝えておきたいと思ってな」

香川が言った。

「僕はお嬢様、いえ、祐子さんはそういう機知に長けているようにお見受け致しました」

「うん、わたしもそう感じてはいるが、何しろ相手が百戦錬磨の^{つわもの}兵だからな。どんな手段を使って交渉を仕掛けてくるか知れない」

祐子は「慎重にならなくてはいけない」と自分自身に言い聞かせた。今は賢のことを思う余裕は無かった。意識して賢のことを考えないことにした。

鷺沼と祐子は社用車で交渉の場所に向かった。交渉は福岡市内にあるハイパートレード社の支社で行うことになっていた。ハイパートレード社は茶色の8階建てビルの3階ワンフロアに事務所を構えていた。エレベータを降りると直ぐに受付のカウンターがあり、そこに電話機が置かれていた。祐子は受話器を上げた。呼び出し音に続いて男性の声で「どちら様でしょうか？」という応答があった。

「東領製作所ですが」

「ただ今伺います」

応答があって、直ぐに40歳前後の眼鏡を掛けた女性が現われた。女性は鷺沼に近付くと軽く頭を下げた。

「社長がお待ち申し上げております。どうぞこちらに」

ふたりが通されたのは応接室だった。応接用の革張りの椅子が6脚置いてあり、テーブルの長手方向に2脚ずつ、両端にそれぞれ1脚ずつ置かれていて、奥の端の椅子に色の浅黒い55、6歳のがっちりした体格の男が座っていた。男は鷺沼の姿を見ると直ぐに席を立ち、歩み寄って来て右手を差し出した。